

諏訪市埋藏文化財調査報告第15集

武居畑Ⅱ

——長野県諏訪市武居畑遺跡第4次発掘調査報告書——

1988. 3

諏訪市教育委員会

諏訪市埋藏文化財調査報告第15集

武居畑Ⅱ

—長野県諏訪市武居畑遺跡第4次発掘調査報告書—

1988. 3

諏訪市教育委員会

TAKEIBATA vol. II

**AN ARCHAEOLOGICAL SURVEY OF
ANCIENT SETTLEMENT AT TAKEIBATA
NAGANO-PREFECTURE, JAPAN**

1988. 3

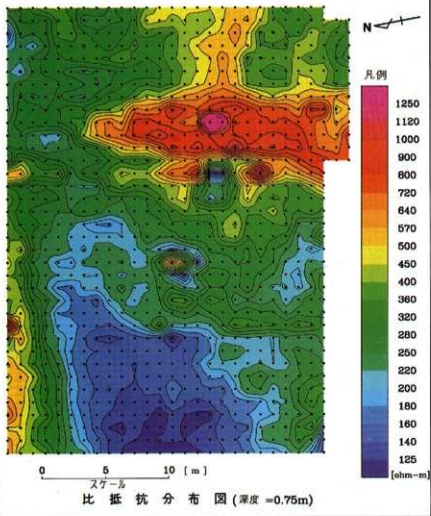
SUWA CITY EDUCATION COMMITTEE



武居畑遺跡全景航空写真

中央の台地上が武居畑遺跡。台地の右上方が武居城跡、手前の林・畑地は諏訪神社上社
神宮寺跡。台地より奥の層状地上には高部遺跡（茅野市）がある。

調査地名: TAEBIBATA



地下遺構物理探査地区の電気比抵抗分布 (本文V章)

序

武居畑遺跡は、諏訪盆地平坦部の西南縁を形成する山麓の台地上に立地し、諏訪市街地の南端近くに当たる。また、遺跡の南側を画する西沢川は、諏訪市と茅野市との行政区画境となっている。諏訪市における遺跡分布の特徴のひとつは、諏訪湖の沖積地である平坦部の両縁山麓に最も遺跡が集中していることである。武居畑遺跡はこうした山麓立地の遺跡の中では市内最南端にある大遺跡である。これらの遺跡群は市街地に隣接するため、近年、宅地や道路など開発対象とされることが多くなり、大規模遺跡のほとんどは何らかの形で破壊を受ける頻度が高まってきている。ところが本遺跡に限っては、幸いな事にこれまでほとんど開発の手が入っておらず、いわば無傷のままに残された諏訪市街隣接の最後の大遺跡なのである。

この貴重な大遺跡を将来にわたって保存し高度活用を計る為、今回遺跡全域に対する詳細分布調査を実施することになったものである。武居畑遺跡の調査に当たっては幾つかの課題があった。過去の採集資料中で最も目をひく縄文前期の遺物の多さ、遺跡山側の保科畑地区に伝承の残る中世居館跡の存在、さらに背後の山頂にある中世山城の武居城跡との関係、隣接する諏訪神社上社との関係などである。詳細分布調査の結果、これらの課題に対する現時点における一定の解答と、今後の研究のための重要な資料を得ることができたと考えている。この調査結果を分析しながら、これからの武居畑遺跡の保存と活用の方策について改めて検討しなければならないだろう。

本調査は国庫および県費補助事業として実施したものである。文化庁・長野県教育委員会と関係者・担当者の方々には特にお世話になった。また、当初から調査に深いご理解を示され、細部にまでわたって全面的な協力を惜しまれなかった地元神宮寺区ならびに同区開発研究委員会とそれぞれの役員の方々、快く土地使用を認めてご協力いただいた地権者の皆様には心から御礼申し上げたい。最後に、冬期間の厳しい条件下、献身的に調査に携わられた調査団の各位のご努力に対して深く感謝申し上げる次第である。

昭和63年3月20日

諏訪市教育委員会
教育長 両角久英

例 言

1. 本書は長野県諏訪市大字中洲神宮寺に所在する「武居畑遺跡」(諏訪市遺跡番号354A)の第4次発掘調査報告書である。
2. 本調査は、遺跡の保存および活用を計るための基礎資料を得ることを目的とした、試掘を伴う遺跡詳細分布調査で、昭和61年度・62年度継続の国庫および県費補助事業として、諏訪市が実施した。
3. 調査は諏訪市教育委員会が調査団を編成して行い、現場における発掘作業を昭和61年12月1日から昭和62年1月10日まで、整理作業を主として昭和62年9月7日から昭和63年3月20日まで、諏訪市考古資料館において行った。
4. 遺跡の地形測量およびグリッドの配置状況については航空写真測量を行った。作業機関は機中央航業で、セスナTU-206型機に航空写真測量用カメラRC-10を搭載して行った。1/200の測量図を原図とし併せて1/500の縮小編纂図を作成した。
5. 遺跡の一部区域に対し、地下遺構の物理探査を行った。方法は電気比抵抗マッピングと電磁波による地下レーダー探査で、いずれも非破壊的手法である。作業機関は機応用地質である。
6. 現場における記録と整理作業の分担は以下の通りである。
遺構等実測……宮坂光昭・高見俊樹・関喜子・原敏江・小松とよみ・矢崎つな子、写真記録……高見、図面・写真整理……平林さき子・青木潤子・五味裕史、水洗・注記・復元・拓本……関・原・小松・矢崎、図面トレース……五味、土器実測トレース……五味、石器実測……小口喜久・高見、石器トレース……高見、遺物写真……五味、図版作成……矢島里美・青木滋子・高見・五味
7. 土器の断面図および実測図中のスクリーントーンは次の通り。



8. 本書の執筆は、Ⅰ～Ⅱ・Ⅳ遺構石器・Ⅵ-1を高見俊樹、Ⅲ・Ⅳ土器・Ⅴ・Ⅵ-2を五味裕史、Ⅶを宮坂光昭が分担し、五味が編集した。
9. 発掘調査および整理に際し、下記の方々のご指導・ご協力を得た。記して感謝申し上げる。
(順不同・敬称略)
岩崎孝治・亀割均・守矢昌文・小林深志・五味一郎・青木一男・伊藤治延・新村恵一・赤羽昭美・金子千要浪・小林正三・守矢勝夫・笠原富夫・守矢静・原誠美・守矢重臣・守矢美恵子・守屋政春・守屋一・弓原幸治・笠原勲・原泰男・原英光・笠原栄・小平昇・宮沢芳晴・赤羽末男・赤羽正和・岩波岩治・岩波一夫・伊藤基次・金子広一・鮎沢渡・赤羽やよい・古河辰二・笠原たけ系・宮沢一正・宮沢徳明・原進一・守矢愛六・守屋眞光・小林孝嘉・小島慎一
10. 本調査の出土品・諸記録は諏訪市教育委員会が保管している。

目 次

カラーグラビア

序

例言

目次

図版目次

I	調査に至る経過	1
	1 過去の調査の概要	1
	2 第4次調査の経過	2
II	調査状況	3
	1 調査の方法	3
	2 調査日誌(抄)	3
III	位置と環境	4
	1 遺跡の位置と環境	4
	2 発掘区の位置と基本層位	4
IV	遺構と遺物	7
	1 遺構検出グリッドの概要と出土遺物	7
	・2/8/12/13/18/21/28/29/35/37/43/44/49/51/56/58/62/65/76/79・79B/83/85/87/94 /97/106/108/112 各グリッド	7
	2 その他の出土遺物	44
	(1)縄文時代の遺物	44
	(2)弥生時代の遺物	52
	(3)古墳時代以降の遺物	52
	(4)各グリッド別出土遺物一覧表	53
V	地下遺構物理探査の結果(報告書より抜粋)	58

VI 調査のまとめ	66
1 各時代の遺構・遺物分布について	66
2 出土遺物について	68
VII 結語	72
引用参考文献	75

写真図版

図版目次

—カラーグラビア—

- 1 武居畑遺跡全景航空写真
- 2 地下遺構物理探査地区の電気比抵抗分布

—挿図—

第1図	武居畑遺跡の位置	5
第2図	遺跡の周辺地形と周辺遺跡	6
第3図	12,13グリッド平面図および2, 8, 12, 13グリッドセクション図	8
第4図	18グリッド平面図およびセクション図	9
第5図	18グリッド出土遺物	9
第6図	21グリッド平面図およびセクション図	10
第7図	21グリッド出土遺物	10
第8図	28グリッド平面図およびセクション図	11
第9図	28グリッド出土遺物	11
第10図	29グリッドセクション図	12
第11図	29グリッド出土遺物	12
第12図	35グリッド平面図およびセクション図	13
第13図	35グリッド出土遺物1)	13
第14図	35グリッド出土遺物2)	14
第15図	37グリッド平面図およびセクション図	15
第16図	37グリッド出土遺物	15
第17図	43グリッドセクション図	16
第18図	43グリッド出土遺物	16
第19図	44グリッド平面図・セクション図	17
第20図	44グリッド出土遺物	17
第21図	49グリッド平面図およびセクション図	17
第22図	49グリッド出土遺物	17
第23図	51グリッド平面図およびセクション図	18
第24図	51グリッド出土遺物1)	18
第25図	51グリッド出土遺物2)	19
第26図	56グリッド出土遺物	20

第27図	56グリッド平面図およびセクション図	20
第28図	58グリッド平面図およびセクション図	21
第29図	58グリッド出土遺物	21
第30図	62グリッド平面図およびセクション図	22
第31図	62グリッド出土遺物	22
第32図	65グリッド平面図およびセクション図	23
第33図	65グリッド出土遺物	23
第34図	76グリッド平面図およびセクション図	25
第35図	76グリッド出土遺物	25
第36図	79. 79Bグリッド平面図およびセクション図	27
第37図	79. 79Bグリッド出土遺物(1)	27
第38図	79. 79Bグリッド出土遺物(2)	29
第39図	79. 79Bグリッド出土遺物(3)	30
第40図	79. 79Bグリッド出土遺物(4)	31
第41図	83グリッド平面図およびセクション図	32
第42図	85グリッド平面図およびセクション図	35
第43図	85グリッド出土遺物(1)	35
第44図	85グリッド出土遺物(2)	36
第45図	87グリッド平面図およびセクション図	37
第46図	87グリッド出土遺物	37
第47図	94グリッド平面図およびセクション図	38
第48図	97グリッド平面図およびセクション図	38
第49図	106グリッド平面図およびセクション図	39
第50図	106グリッド出土遺物(1)	41
第51図	106グリッド出土遺物(2)	42
第52図	108グリッド北東壁セクション図	43
第53図	108グリッド出土遺物	43
第54図	112グリッド平面図およびセクション図	43
第55図	112グリッド出土遺物	43
第56図	その他のグリッド出土土器(1)	45
第57図	その他のグリッド出土土器(2)	47
第58図	その他のグリッド出土土器(1)	48
第59図	その他のグリッド出土土器(2)	50
第60図	その他のグリッド出土土器(3)	51

第61図	その他のグリッド出土土器(3).....	52
第62図	比抵抗マッピングの測定装置.....	59
第63図	地下レーダーシステム概念図.....	60
第64図	調査範囲及び地下レーダー測線位置.....	62
第65図	反射体位置および地下レーダー記録例.....	63
第66図	物理探査結果.....	65
第67図	出土遺物分布図(縄文土器).....	67
第68図	出土遺物分布図(弥生土器・須恵器・土師器).....	69
一表一		
表1	各グリッド出土遺物一覧表(石器).....	53
表2	各グリッド出土遺物一覧表(縄文土器).....	54
表3	各グリッド出土遺物一覧表(弥生時代以降の土器).....	56
表4	グリッド別遺構一覧表.....	71

一写真図版一

1	遺跡全景(航空写真)	12	79・79Bグリッド出土土師器各器種
2	遺跡近景(中央より東方、八ヶ岳を望む)	13	79・79Bグリッド出土土器(1)
3	8グリッド(遺構No.26)	14	79・79Bグリッド出土土器(2)
4	43グリッド(遺構No.24)	15	85グリッド出土土器
5	58グリッド(遺構No.16)	16	106グリッド出土土器
6	85グリッド(遺構No.30)	17	各グリッド出土土器(1)
7	106グリッド(遺構No.13)	18	各グリッド出土土器(2)
8	79グリッド(遺構No.11)の土師器配列	19	各グリッド出土土器(1)
9	79グリッド(遺構No.11)の土師器配列	20	各グリッド出土土器(2)
10	18・28グリッド出土土器	21	各グリッド出土土器(3)
11	35グリッド出土土器		

一附図一

武居畑遺跡航空測量図



I 調査に至る経過

1. 過去の調査の概要

武居畑遺跡については、過去3回の部分的な発掘調査が行われ、その他にも耕作中の遺物出土などが報告されている。それぞれ概要については以下の通りである。なお、本遺跡はその範囲が極めて広く、過去においては小字名などにより複数の名称を与えられてきているため、()内に地区名としてこれらの名称を付記することとする。また、採集資料については割愛した。

・第1次調査(仲畑地区1235番地宮沢一正氏畑—第4次調査29グリッド付近—)

昭和41年、耕作中に須恵器破片多数が出土し、地主の連絡を受けた諏訪考古学研究所がこれらの出土状況を把握するために当該畑の発掘調査を実施している。出土遺物は平安時代の須恵器蔵骨器と考えられる一括遺物で、調査の結果、蔵骨器を埋設するための礎敷遺構的な施設があったことが確認されている。須恵器は8個体が復元された。また、これらとは時期を異にする土師器等も発見されている。

・第2次調査(武居畑地区原英充氏畑—第4次調査60グリッド付近—)

昭和52年11月、遺跡中央窪地の一部について、諏訪市史および中洲村史編纂のための学術発掘調査を諏訪市教育委員会が実施した。遺構としては、縄文時代前期末から中期初頭にかけての時期と考えられる重複しあう竪穴住居跡3および土壇5基が発見された。遺物は土器片・石器片多数のほか、1号土壇からは諸磯B式の完形深鉢1点が出土している。

・第3次調査(現林道部分、^{ひびすしや}蛭子社地区B地点・^{ほしやぶた}保科畑地区—第4次調査7・12・6グリッド付近—)

昭和58年9～10月、林道扁平南峠線開削に先立ち、諏訪市教育委員会が実施した緊急発掘調査である。蛭子社地区では自然巨石の周辺よりカワラケ片の一括出土が認められた。保科畑地区からは、中世のものと考えられる溝状遺構などが検出され、中世居館跡存在の可能性などについて注目されている。

・蛭子社地区A地点(五味哲男氏畑—第4次調査18グリッド付近—)

耕作中にカワラケ12点などが一括出土している。発見者によるとカワラケは重なって出土した模様である。平安時代後期のものと考えられている。

・蛭子社地区C地点(五味哲男氏畑—第4次調査42グリッド付近—)

耕作中に縄文時代前期の深鉢型土器破片1点と古墳時代の土師器3点が出土している。遺構等の存在は明らかでない。

・その他

他に、直刀・勾玉などの出土が伝えられるが地点は明らかでない。

2. 第4次調査の経過

武居畑遺跡は、諏訪盆地平坦部の西南縁を形成する山麓の台地上に立地する。幸いな事にこれまでほとんど開発の手が入っておらず、いわば無傷のままに残された諏訪市街隣接の最後の大遺跡であり、この貴重な大遺跡を将来にわたって保存し高度活用を計る為、今回遺跡全域に対する詳細分布調査を実施することになった。

本調査は地元神宮寺区の全面的な協力によって、実現の運びとなったものである。同区においては、この50,000㎡にも及ぶ大遺跡地を今後どのように保存し、また地域の活性化のために役立つのかという点について、神宮寺区開発研究委員会が中心となって、数年来研究を重ねてきている。また、市教育委員会においても、この貴重な最後の大遺跡を乱開発から守り、その保存と活用をどのように計るべきかについて検討を迫られる時期にあった。こうした遺跡保護にむけた両者の意向をひとつの機会として、遺跡保護方法を検討するための資料を得るために、この詳細分布調査が計画されることになったものである。この間、数回に渡り、市教委と区・役員・地権者との会議や打ち合わせが実施され、調査を補助事業によって市教委が行うこと、調査に際して区および地権者は必要な協力をするなどが取り決められた。この話し合い結果に基づき、昭和61年12月より、試掘を伴う分布調査が実施される運びとなった。

◎武居畑遺跡調査団（第4次調査）

団 長	篠原菊彌（諏訪市教育委員会 教育長）	62年5月まで
	両角久英（諏訪市教育委員会 教育長）	62年6月から
副 団 長	中村善行（諏訪市教育委員会 教育次長）	62年5月まで
	熊谷経三（諏訪市教育委員会 教育次長）	62年6月から7月まで
	野口利夫（諏訪市教育委員会 教育次長）	62年8月から
調査主幹	宮坂光昭（日本考古学協会会員 諏訪市文化財専門審議会委員長）	
調 査 員	高見俊樹（諏訪市教育委員会 学芸員）	
調査団員	原敏江・小松とよみ・関喜子・矢崎つな子・平林さき子・増沢洋・赤沼豊治 宮沢恵津雄・牛山茂・守矢静・原田みなと・北原ふく・宮沢ヤス子	
整理参加	五味裕史・青木潤子・金井武	
事務主幹	茅野安直（諏訪市教育委員会 社会教育課長）	62年5月まで
	宮坂誠文（諏訪市教育委員会 社会教育課長）	62年6月から
事務局長	宮坂直木（諏訪市教育委員会 社会教育係長）	
事務局員	久保田由起子・高見俊樹・上原修（諏訪市教育委員会 社会教育係）	

II 調査状況

1. 調査の方法

調査は、遺跡全域にほぼ均等に配置されるように試掘のためのグリッド約100箇所を設定して行った。この設定ははじめ図面上で行い、現地踏査によって形状・現状での土地利用状況・障害物等について調査し、発掘の可否を判断し、位置を概ね決定した。発掘開始時に現地測量によって各グリッドを測りだしたが、より正確を期するため全体の地形航空測量に際し各グリッドの位置および標高を計測し全体図（本書付図）に落としした。発掘深度は遺構確認面までとした。

2. 調査日誌（抄）

（昭和61年）

- 10月～11月 調査準備・試掘グリッド位置決定
- 12月1日 発掘調査開始・器材搬入・グリッド設定開始・一部発掘開始（表土剥ぎ）
- 2日 遺構No.1～No.5検出・28グリッドにおいてカワラケを出土する中世遺構確認
- 5日 遺構No.6～No.10検出・65グリッドにおいて縄文の住居確認・航空測量説明会
- 6日 79グリッドにおいて土師器配列遺構（遺構No.11）を検出し一部を拡張（79B）
- 8日 遺構No.12～No.21検出・106グリッドにおいて縄文前期の遺物包含層を検出
- 9日 遺構No.22～No.23検出・108グリッドにおいて大規模な堀状遺構を検出
- 10日 遺構No.24検出・43グリッドにおいて平安時代の遺物多数出土
- 11日 遺構No.25～27検出・保科畑地区の2グリッドにおいて中世の遺物が出土
- 12日 各グリッド記録作業開始
- 13日 79グリッドの土師器配列の記録・実測・写真
- 12月14日～16日 記録および埋め戻し
- 12日～31日 地形およびグリッド航空測量

（昭和62年）

- 1月5日～10日 現場測量ほか残務処理
- 2月7日～28日 地下遺構物理探査実施
- 1月20日～24日 基礎的整理作業実施
- 9月7日～10月14日 遺物整理作業実施

（昭和63年）

- 1月4日～3月20日 報告書作成のための作業実施

III 位置と環境

1. 遺跡の位置と環境

海拔標高759mの諏訪湖を中心として北西—南東方向に広がる諏訪盆地は、本州のほぼ中央部に位置し、いわゆるフォッサマグナの西縁を形成する糸魚川—静岡構造線に沿って形成された、構造盆地である。盆地は、その北部から東部にかけては塩嶺峠・高ボッチ山・鉢伏山・二ツ山、更には三ツ嶺山・霧ヶ峰・八ヶ岳等の火山群へと続く山塊により、又、西南部は入笠山・守屋山等の山塊によって周囲を囲まれる。盆地西南部を画する守屋・入笠山系は赤石山脈の北縁にあたるが、そのやや急峻な地形の盆地側先端部は断層活動のために断層崖を形成する。これらの断層崖上には部分的に平坦な地形が何か所か残されており、その丘陵状地形上とそれらを区画する沢筋に発達した扇状地上には各時代の遺跡が数多く確認されている。本遺跡もこの遺跡群に属する。

武居畑遺跡は、いずれも宮川の支流である西沢川・女沢川がそれぞれ流れる、南側の西沢と北側の女沢によって挟まれ、東端を断層崖により区画された標高約810~838mのなだらかな台地上に位置している。この台地の後背部はゆるやかな溝状の地形を経て比高約100mの支尾根頂部に連なる。また本遺跡は独立丘陵状の台地上という良好な立地条件のほかに、背後には伊那谷との交通の要衝である杖突峠をひかえている。下馬沢川によって形成された遺跡南側の扇状地上には、縄文時代および古墳—平安時代の集落跡である茅野市高部遺跡が存在するほかに、ここ盆地西南側の西山地区一帯はフネ古墳・片山古墳をはじめとする古墳群の存在も知られている。武居畑遺跡の位置する台地の東側斜面にはも、赤ナギ古墳が、南側の小台地上には鉄剣を出土したとされる武居畑古墳が存在する。また遺跡の北西側約400mには、全国に多くの末社を有している諏訪神社の上社本宮が位置する。武居畑遺跡背後の支尾根頂部には、諏訪五郎時重の築城といわれ上社本宮の守りであったと思われる武居城跡がある。武居畑遺跡の北西部を片山、北東部を仲畑、南半を保科畑と称するが、武居城跡の直下にあたる保科畑地区には山城に関連する居館があったという伝承が残っている。武居畑遺跡の位置する台地上は、現在ほとんどが畑地となっている。

2. 発掘区の位置と基本層序

今回は遺跡の詳細分布調査であるため、2×2mの試掘坑を遺跡指定範囲全体中の任意の地点約100箇所掘り、確認を行った(附図)。基本層序は地点ごとに一定しないが、全体的に耕作による攪乱が地表下約20~80cmまで及んでいる。



第1図 武居烟遺跡の位置 (1/50,000)

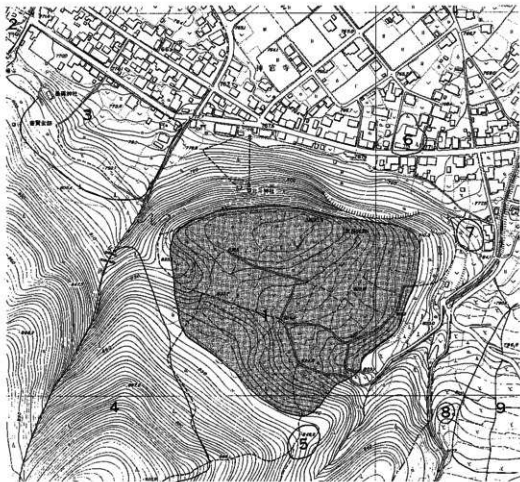


図 No.	諏訪市 遺跡No.	遺跡名	立地	縄文					弥生 中後	古墳 住墳	奈良	平安	中世	近世
				早	前	中	後	晩						
1	354A	武居畑	丘陵	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	
2	352	諏訪神社上社	山麓			●						●	●	
3	353	神宮寺跡	山麓									●	●	
4	356	武居城跡	山頂									●		
5	354B	武居畑古墳	山頂							●				
6	357	権祝屋敷	平地									●	●	
7	367	赤ナギ古墳	山麓							●				
8	—	竜窟神塚古墳	山麓							●				
9	—	高部	扇状地	●	●	●	●		●	●		●	●	

第2図 遺跡の周辺地形と周辺遺跡 (1/5,000)

IV 遺構と遺物

1. 遺構検出グリッドの概要と出土遺物

2グリッド (第3図)

調査状況 地表下約40cmで粘質の暗褐色土層に達し、若干の遺物出土をみる(遺構No27)。こうした状況は隣接の8グリッドとも共通し、広い範囲に同時期の遺構や遺物包含層が分布することが予想される。

出土遺物 土師質土器の細片が数点出土している。

8グリッド (第3図)

調査状況 地表下約40cmで粘質暗褐色の遺物包含層を検出した。この層を覆土とする何らかの遺構を平面的に確認したが(遺構No26)形状は明らかでない。現状でみる限りは溝状遺構のように観察される。

出土遺物 疑似高台状の台付土師質皿の破片と思われるものなど土師質土器の細片20数点と陶器片1点が遺構確認面から検出されたほか、須恵器片などが出土している。

12グリッド (第3図)

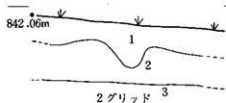
調査状況 地表下約30cmで黄褐色粘質土層に達し、谷側に浅い堅穴状落ち込みの一部を検出した(遺構No25)。伴出遺物もなく、遺構の時期・性格は不明である。2・8・12グリッドは「保科畑地区」に属するが、本地区には中世居館跡の伝承があり、また第3次調査においても関連すると見られる溝状遺構が検出されている。今回の調査でも中世の遺物が他のグリッドより比較的多く、不明確ながら遺構が検出された点は注目される。

出土遺物 遺物は検出されなかった。

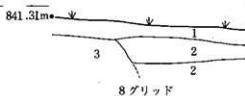
13グリッド (第3図)

調査状況 地表下約50cmで暗褐色の堅い面を確認した(遺構No28)。この面上において礎および遺物分布が認められる。面の性状と礎・遺物分布の状態は、本グリッドに隣接する第3次調査の調査区(姪子社地区)の様子と酷似しており、同一のものである可能性が高い。

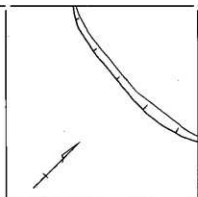
出土遺物 遺構確認面から土師質土器の底部破片が1点出土している。



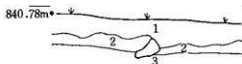
- 2グリッド
- 1……表土、暗褐色土層。粒状あらく、茅の根が多い。
 - 2……暗褐色土層。粒状細かく粘質でややしまる。
 - 3……赤味の強い暗褐色土層。粒状細かく粘質強い。



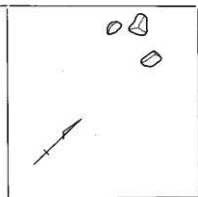
- 8グリッド
- 1……表土、暗褐色土層。粒状あらく軟弱。
 - 2……暗褐色土層。粒状細かく粘質。
 - 3……赤褐色土層。粒状粗かく、小石を含有する。



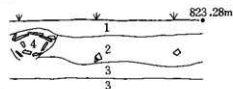
12グリッド



- 1……表土、暗褐色土層。粒状細かいが軟弱。
- 2……暗褐色土層。粒状細かく粘性高い。
- 3……赤褐色土層。粒状細かくかたくしまる。



13グリッド



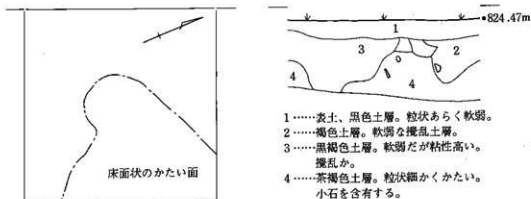
- 1……表土、暗褐色土層。軟弱だが粘性高い。
- 2……暗褐色土層。粒状細かく小石を含有する。
- 3……茶褐色土層。粘性高い。
- 4……暗渠排水による擾乱。

第 3 図 12・13グリッド平面図および2・8・12・13グリッドセクション図 (1/40)

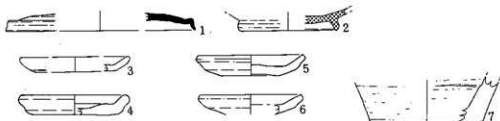
18グリッド (第4・5図)

調査状況 表土および表土下の黒色土がやや厚く、耕作による攪乱を受けているものと考えられる。この黒色土と、さらにその下の褐色土中より平安から中世にいたる時期の土器片多数が出土している。地表下約70cmで、グリッド東半の一部に堅い面が検出されるため、これが遺構の床面である可能性がある(遺構No.2)。従って、これより上位の土層に覆土が存在すると思われるが、攪乱のため不明確であった。床面状の面の範囲についても、攪乱の影響が予想されるため、確定的なものではない。

出土遺物 須恵器坏蓋の小破片(1)の他、「かわらけ」(3-6)の破片等が出土している。2は高台付きの灰陶陶器の底部破片で、胎土に白色粒子と少量の黒色粒子を含み焼成は良好、色調は淡灰色を呈する。3は淡い肌色を呈し焼成は良好、胎土に白色粒子・橙色粒子・黒色微粒子を含む。小片からの復元実測で表面は摩滅している。4は厚めの作りで肌色を呈し、胎土に2-3mm大の茶色の粒子を含み、体部はほぼ直線的に外方に立ち上がる。ロクロ成形で、底部切り離し後底部外面を撫でており、又、底部内面はカキトリをおこなっている。破片からの復元実測で推定口径8.4cm、底径7.4cm、器高1.6cmを測る。5は細片からの復元実測で胎土に細砂粒を含み焼成は良好、やや淡い茶褐色を呈する。内面はほぼ直線的に外方に向け立ち上がり、外面にはゆるやかな稜を有する。口唇部断面は方形に近く、「面取り」されたような形状を示している。6は胎土



第4図 18グリッド平面図およびセクション図(1/40)



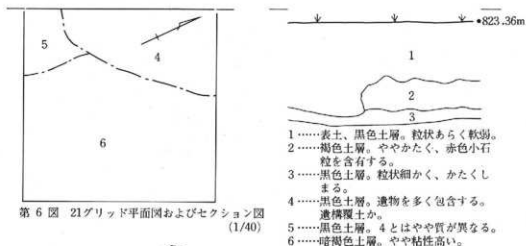
第5図 18グリッド出土遺物(1/3)

に2mm大以下の砂粒・白色粒子を多く含む焼成は大変良好で、やや灰色がかかった淡褐色を呈する。内面は直線的に立ち上がるが、体部外面はふくらみ（稜）を持っている。口唇部断面は方形に近い。約5分の2個体からの復元実測で推定口径8.2cm、底径4.5cm、器高1.6cmを測る。底面に回転糸切り痕といわゆる板状圧痕を残す。7は陶器の底部と思われるが釉はかかっていない。胎土には白色・黒色の粒子を含んでおり、表面は淡褐色、断面は青灰色を呈するが、所属時期は不明である。

21グリッド（第6・7図）

調査状況 表土の黒色土が厚く、さらにその下に褐色の第2層、黒色の第3層がある。第3層下部、地表下約1mが遺構の確認面である。この面における土層分布は第6図に示すとおりである。北側の黒色土部分に遺物多数が検出されるため、これが落ち込みと考えられる（遺構No.4）。また、これとは質を異にする土層が同一面上で確認されるため、他にも遺構が存在し、重複していることも考えられる。遺物としては、古墳時代の高坏などの土師器破片が比較的多く出土するが、他にも弥生土器片や磁器片も検出されている。

出土遺物 土師器坏および高坏の破片等20数点が出土している他、弥生時代後期土器片（1）・磁器片（2）等が出土している。



- 1 ……表土、黒色土層。粒状あらく軟弱。
- 2 ……褐色土層。ややかたく、赤色小石粒を含有する。
- 3 ……黒色土層。粒状細かく、かたくしまる。
- 4 ……黒色土層。遺物を多く包含する。遺構覆土か。
- 5 ……黒色土層。4とはやや質が異なる。
- 6 ……暗褐色土層。やや粘性高い。



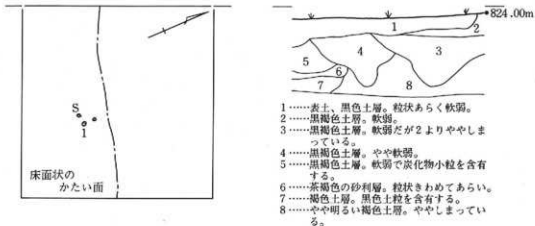
第7図 21グリッド出土遺物 (1/3)

28グリッド (第8・9図)

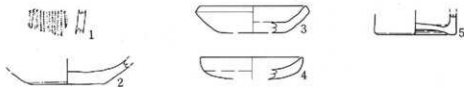
調査状況 層位は第8図に示すとおり、やや複雑である。過去における攪乱もあると思われるが、一部に砂利が検出されていることから、ある時期に水流によって洗われ、層位に影響が及んだことも考えられる。これらの土層より下位、表土下約70cmにおいて、一部に床面状の堅い面が確認される(遺構No.3)。立ち上がり及び面の範囲は不明確であるが、面の形状からみて、竪穴住居の床面の可能性が高い。この面は粘質に富む黒色土で、面上より土師質土器の破片や礫が出土している。また、覆土を含むと思われる上位の層からも土器片が検出された。

出土遺物 土器では、土師器片を中心として土器片数十点が出土している。1は櫛状工具による条線を有する縄文土器片である。2は土師器杯の底部で、胎土に白色粒子を少量含み焼成は良好である。底径6.0cmで底面に回転糸切り痕を残す。3・4は土師質のいわゆるかわらけで、共に小破片からの復元実測である。3は胎土に白色小石粒を多く含む。底部からやや内側気味に立ち上がり、口唇部断面は方形に近く、「面取り」をした様な形状を呈する。推定口径8.3cm、底径5.4cm、器高2.1cmで底面に回転糸切り痕を残す。4は丸底で体部に稜を有し、口縁部は内彎しながら外方に向けて開く。体部下半には指頭圧痕が残るようである。5は白色を呈する磁器底部で、近代以降に属するものであろう。

石器類としては、黒曜石の原石の小破片2点が出土している。



第8図 28グリッド平面図およびセクション図 (1/40)

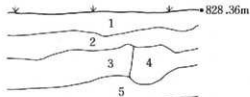


第9図 28グリッド出土遺物 (1/3)

29グリッド (第10・11図)

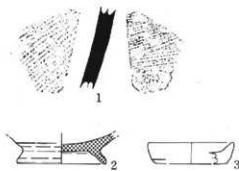
調査状況 本グリッドは台地中央の谷状部分になるため、黒色土が深く、地表下約80cmまで発掘したが地山には至っていない。深い黒色土下において、土師器など土器片が集中する覆土のな層位となり、遺構の存在が予想された。(遺構No.9)

出土遺物 須恵器片(1)・土師器片各数点などが出土している。1は須恵器大甕胴部の破片である。2は灰釉陶器の底部破片で、高台を有する。色調は灰白色で、胎土には黒色微粒子を含み、釉が底部内面にまだらの縞状に付く。底部外面に回転糸切り痕を残す。3はかわらけで、底部に回転糸切り痕を有し、外面はやや内彎気味、内面は直線的に外方に向け立ち上がる。口径・底径差が小さい。小片からの復元実測である。



- 1……表土、黒色土層。粒状はあらく、軟弱。
- 2……やや明るい黒色土層。植物根を多く含有する。
- 3……黒色土層。ややかたくしまる。
- 4……2層起源の黒色土層。攪乱。
- 5……漆黒色土層。粒状はやや細かくかたい。

第10図 29グリッドセクション図 (1/40)



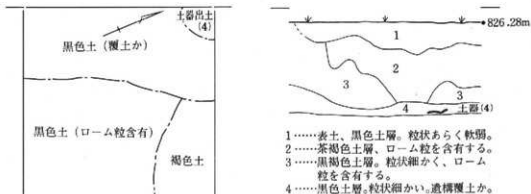
第11図 29グリッド出土遺物 (1/3)

35グリッド (第12・13・14図)

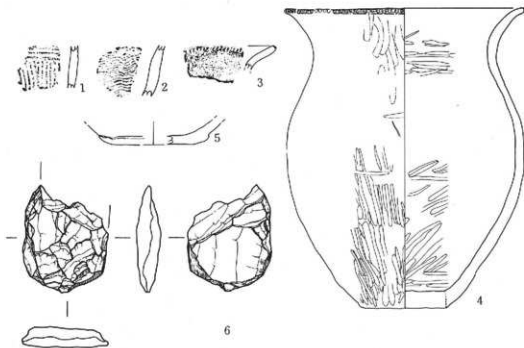
調査状況 厚い黒色土下、地表下約80cmにおいて遺構覆土と考えられる土層に達する(遺構No.5)。この層上部よりほぼ完全の甕が出土したほか、土器片多数が検出された。この確認面の状況は第12図に示すとおりであるが、他にも土層の違いが認められ、複数遺構の重複も考えられる。

出土遺物 土器は遺構確認面から甕(4)が一括出土したほか、縄文土器細片数点・弥生土器片(1~3)および土師器片(5)数十点・須恵器片数点の出土をみた。1は条痕を施された土器片で、弥生時代中期に属するものであろう。2は拂描きによる波条文を有する。4は胴部最大径を器高の半ばに持ち口径と底径がほぼ等しい甕で、胎土に細砂粒と白色粒子を含む。外面はやや赤みがかかった淡い茶色、内面はやや淡い茶褐色を呈し、焼成は良好である。胴部下半外面に特に密なタテヘラミガキ痕を有しており底面にも密だがやや雑な円周方向のヘラミガキ痕を残す。内面は頸部が横方向、胴部が横～縦方向のヘラミガキ痕を有する。頸部には成形時のものと思われる縦方向のヘラナデ痕を残す。口縁は外反し、口唇には筥状工具の押圧による刻み目が施される。口径19.1cm、底径6.9cm、器高23.8cmで約3分の2個体が残存している。3も甕の口縁部で口唇に刻み目を持つ。2・3・4共に弥生時代後期に属するものであろう。5は確認面の出土であるが時期は不明である。

石器は遺構覆土より上層の1～3層から7点が出土している。図示した5点以外には、黒曜石の剥片2点がある。いずれも縄文時代のものである。6は緑色片岩製の打製石斧で、基部側を欠損する。幅4.5cm、厚さ1.2cmを測る。加工状態はやや粗く、腹面側はとくに平坦である。刃部は磨耗が著しく、側辺部にもつぶれが観察される。7～10の4点は凹石・磨石・叩石の類である。

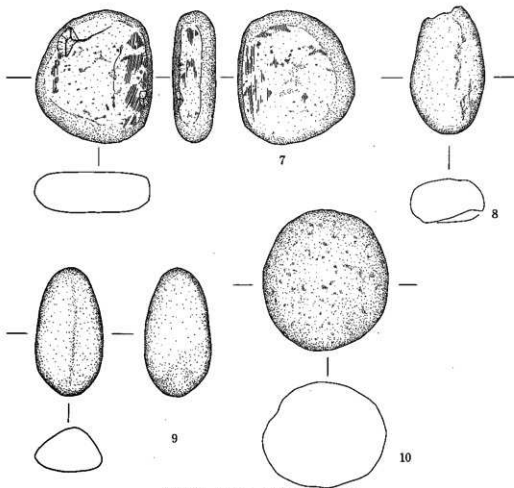


第12図 35グリッド平面図およびセクション図 (1/40)



第13図 35グリッド出土遺物1) (土器 1/3・石器 1/2)

7はいわゆる磨石である。安山岩製で、長さ10.5cm、幅9.3cm、厚さ3.2cmを測る。完形品で、全面にわたってよく磨かれているのが特徴的である。表面、裏面ともきわめて平坦で、この平坦面の表面はきめ細かく、入念に磨かれた、あるいは使用の結果磨耗した様子が窺われる。また、両面と比べればやや粗いものの、側面の一部もよく磨かれている。この面は長さ8cm、幅1.8cmの平坦面となっている。この結果、横断面形は整った長楕円形、平面形は半円形に近いものとなっている。8は凹石もしくは磨石であるが、片面が広く剥落しているため原状は明らかでない。安山岩製で、長さ10cm、幅6cm、厚さ約3.5cmを測る。平面形は長楕円形である。全面にわたって、成形痕を有し、特に磨耗痕が顕著である。9は断面三角形の磨石である。安山岩製で、長さ10cm、幅5.3cm、厚さ3.5cmを測る。完形品であるが、成形痕はあまり顕著でない。10は横断面形が円形に近い厚い磨石である。多孔質で軟質の安山岩製で、長さ10.2cm、幅10cm、厚さ8.2cmを測る。全面が入念に成形され、敲打痕・磨耗痕ともに顕著に観察される。

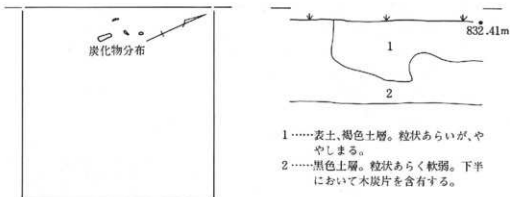


第14図 35グリッド出土遺物2) (1/3)

37グリッド (第15・16図)

調査状況 本グリッドは台地中央の谷状地形のうち、東西へ傾斜方向の分れる鞍部付近にあって、現状地形でみるかぎり、谷の中では最も平坦な地区である。周辺のグリッドと同様に表土および黒色土が深く、第15図に示すとおり層位は単純である。地表下約90cmで、遺物を包含する黒色土層を検出した。この層中には比較的濃密に焼土が含まれており、炭化物(木炭塊)も分布する。こうした在り方は、いわゆる焼失住居などの覆土や、住居跡の床面近くにおいて観察される状況と似ており、本層は住居の覆土である可能性が高い(遺構No.8)。また、本層中より、弥生土器片などが出土している。

出土遺物 1はRLの斜縄文を施し、裏面に指頭瓦痕を残す。胎土に金雲母片と白色粒子を含んでおり、縄文時代前期前半に属するものであろう。2は口縁部近くがやや肥大し頸部がゆるやかにくびれる器形で、頸部以下には綾杉状または格子目状の節描文(ハケ目文?)が加えられるらしい。口唇部はたいらで縄文が施されるほか、口縁部もヨコナデの後に部分的に縄文が施される。口縁部内面はヨコナデの後丁寧なヨコヘラミガキが施されている。胎土に金雲母の微粒子と白色粒子を含んでおり焼成は良好、色調は灰褐色で口縁部外面には炭化物の付着が認められる。3も口縁部外面の縄文と炭化物付着が認められないほかは2によく似ており、あるいは同一個体かと思われる。いずれも弥生時代中期に属するものであろう。



第15図 37グリッド平面図およびセクション図 (1/40)



第16図 37グリッド出土遺物 (1/3)

43グリッド (第17・18図)

調査状況 台地全体のほぼ中央、谷状地形部分にあって、黒色土が深い。表土下約1mで、平安期と考えられる遺物多数を包含する黒色土層を検出。遺構の覆土と考えられる(遺構No.24)。

出土遺物 縄文土器片10数点、土師器片10数点、須恵器片数点が出土している。1は土師器坏または高坏の口縁部破片と思われるが、小破片からの復元実測であるため実際はもう少し口径が小さくなるかも知れない。内面は黒色処理を施しよく研磨され、外面はヨコナアを行っている。

石器では、黒曜石製の石核1点、剥片1点が出土した。

44グリッド (第19・20図)

調査状況 37グリッドに隣接し、黒色土が深い。表土した約90cmの、遺物を包含する黒色土層において、焼土分布および平板状の石を検出した(遺構No.17)

出土遺物 縄文土器片10数点、土師器片10数点、須恵器片数点が出土している。1は遺構確認面から検出された縄文土器片で、半截竹管による平行沈線上に粘土粒と口縁からの縦位の細い粘土紐の張り付けが施される。諸磯期に属するものであろう。

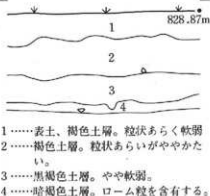
石器では、黒曜石製の剥片1点が出土した。

49グリッド (第21・22図)

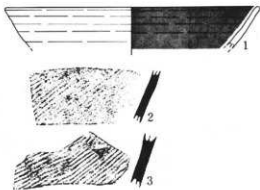
調査状況 台地中央部にあって、黒色土下約60cmのローム土層上面において、円形の竅穴住居の一部と考えられる落ち込みを確認した(遺構No.1)。

出土遺物 縄文土器片・弥生土器片・土師器片各数点が出土している。1は胎土に繊維痕を有し、LRの単節縄文を施す。縄文時代前期初頭又は前半に属するものであろう。2は櫛歯状工具により斜状文を施す弥生土器である。

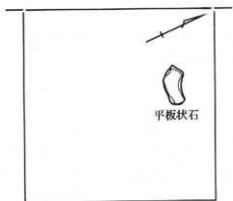
石器では、黒曜石製の剥片1点と、平盤状の砥石小破片1点が出土した。



第17図 43グリッドセクション図 (1/40)



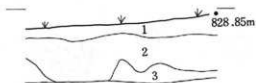
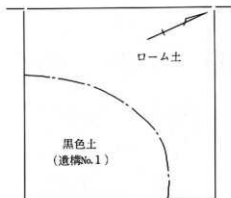
第18図 43グリッド出土遺物 (1/3)



第19図 44グリッド平面図・セクション図 (1/40)

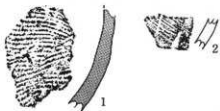


第20図 44グリッド出土遺物 (1/3)



- 1……表土、黒色土層。粒状あらく軟弱。
 2……黒色土層。粒状あらくややかたい。
 3……黒褐色土層。粒状細かくかたい。
 ローム土の小ブロックが混入する。

第21図 49グリッド平面図およびセクション図 (1/40)

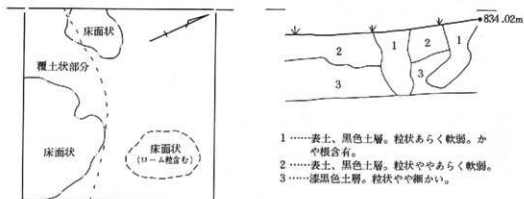


第22図 49グリッド出土遺物 (1/3)

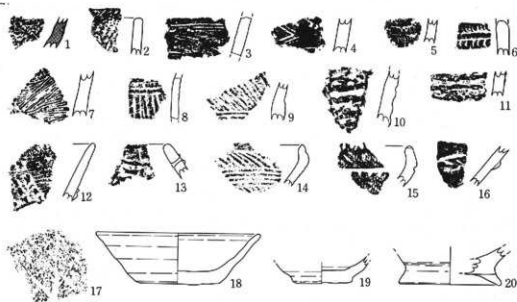
51グリッド (第23~25図)

調査状況 台地中央部西よりの、谷状地形鞍部に所在するグリッドである。地表下約70cmにおいて、遺構の床面と考えられる面的広がりを検出した(遺構No7)。第23図に示すとおり、堅い面が3箇所あり一部にはローム粒が含まれている。また、これとは別に、この面を確認面として、土層の違いが認められ、円形の竖穴状遺構の覆土のようにも観察される。

出土遺物 土器は縄文土器片が数十点・土師器片が10数点出土している。縄文土器は諸磯期に属するものが多い。1は胎土に砂粒を含み繊維痕を有する。L Rの縄を用いた燃糸文が施される。2は口縁部の破片で、外面にはL Rの縄文を施す。口唇は平坦で、外面に施された縄文の原



第23図 51グリッド平面図およびセクション図 (1/40)

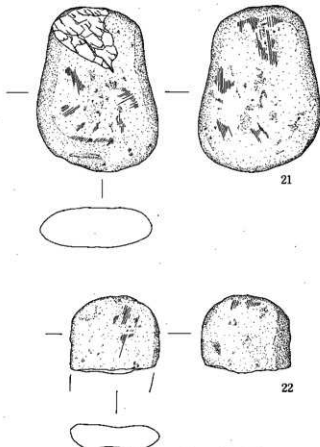


第24図 51グリッド出土遺物(1) (1/3)

体よりも細い撚りの原体による縄文が施される。焼成は良好でくすんだクリーム色を呈する。3は半截又は多截竹管により平行沈線を描く。胎土に石英粒を含む。4は半截竹管による平行沈線と爪形文を施す。部分的に地縄文を持ち、内面茶褐色、外面暗茶褐色を呈する。5・6はやはり半截竹管により爪形文を描出し、茶褐色を呈する。4～6は胎土に金雲母片と石英粒を含む。7～9は集合沈線が施文されるものである。7は胎土に砂粒を含み焼成は良好でクリーム色を呈する。10～12は隆帯が施されるもので、11は地縄文、12は沈線を地文に持つ。13は有孔土器の口縁部である。1・2は前期前半、3～13は前期後半諸磯a～c式期に属するものと思われる。14・15は中期初頭、16は後期前葉の土器片であろう。17は所属時期が明確でないが木葉痕を有する底部破片である。

18は土師器坏で、約2分の1個体からの復元実測である。推定口径13.0cm、底径6.5cm、器高4.0cmで、底面に回転糸切り痕を残す。焼成は良好で暗褐色を呈し、胎土に細砂粒と微細な金雲母片を含む。19は土師器底部破片であるが器種不明である。胎土に石英粒と金雲母片を含み、茶褐色を呈する。20は張付高台を有する土師器の底部破片である。焼成良好で微細な金雲母片を含み、茶褐色を呈する。

石器としては、第25図に示す磨石2点などが検出された。21は長さ13cm、幅9.5cm、厚さ3.2cmを測る安山岩製の磨石である。平面形は最大幅が一方にかたよっており定形的ではないが、両面ともに研磨痕が顕著である。明確な凹みは観察されないが、両面の中央付近には小さな敲打痕もある。また、片面には使用後のものか大きな剝落が一面ある。22は安山岩製の比較的の小形の石器で一種の磨石である。幅7cm、厚さ1.9cmを測るが下半を欠損する。定形的ではなく、一部に研磨痕を残すが加工状態は整緻ではない。このほかの石器類としては、黒曜石製の剝片5、石核1、原石片3が出土しているが、いずれも小破片である。

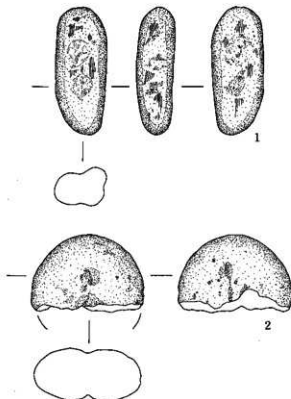


第25図 51グリッド出土遺物21(1/3)

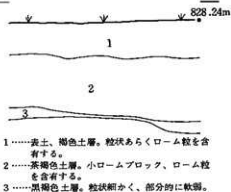
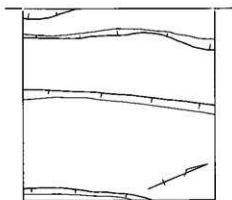
56グリッド (第26・27図)

調査状況 台地中央部に位置する。地表下約90cmでローム面に達する。この面において第27図に示すとおり階段状もしくは溝状とみられる落ち込みが確認される(遺構Na29)。これらの落ち込みについては、形状は比較的明確であるものの、伴出遺物等が明らかでなく性格は不明である。また、覆土に相当する土層がそれほど軟弱ではないものの、ロームブロックやローム粒を大量に含有することなどから見ると、あるいは近年の擾乱行為の結果である可能性も否定できない。

出土遺物 本グリッドからは土器片などは出土しなかった。石器類は3点が検出された。1は細長い棒状の凹石である。安山岩製で、長さ10.1cm、幅4cm、厚さ3cmを測る。3面に浅いものも含め、凹み各2があり、3面とも研磨痕が顕著に認められる。2は円形の定形的な凹石の半欠品である。安山岩製で幅8.9cm、厚さ4.1cmを測り両面に凹みを有する。他に黒曜石製の剥片1点が出土した。



第26図 56グリッド出土遺物 (1/3)



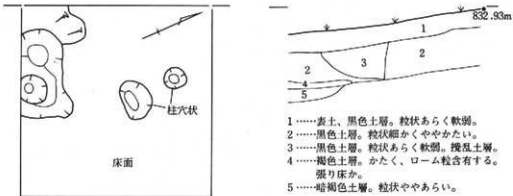
第27図 56グリッド平面図およびセクション図 (1/40)

58グリッド (第28・29図)

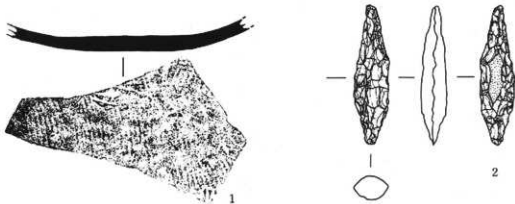
調査状況 表土下約60cmで、堅いローム土の床面に達する(遺構No16)。明瞭な覆土が検出されず、出土遺物も少ないことから、床面直上までなんらかの攪乱を受けている可能性がある。この床面上において、2個の柱穴状ピットと、攪乱とも思われるその他のピット2が検出された。また、一部に張り床の土層も観察される。

出土遺物 出土土器は縄文土器片数点、須恵器・土師器片各1点である。1は須恵器大甕の底部破片と思われる。

石器としては図示した1点のみである。2は長さ5.4cm、幅1.4cm、厚さ0.9cmを測る安山岩製の石器である。尖った先端を有する平面形や分厚い横断面形などから、石錐の一種かとも考えられるが、不明である。石質も特徴的である。



第28図 58グリッド平面図およびセクション図 (1/40)



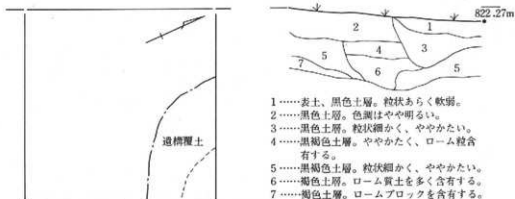
第29図 58グリッド出土遺物 (1…1/3, 2…2/3)

62グリッド (第30・31図)

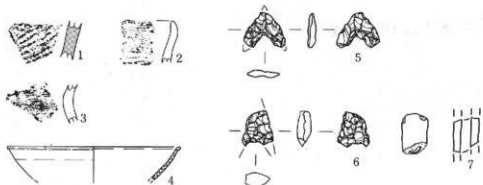
調査状況 地表下約60cmでローム上面に達する。この面を確認面として、黒色土部分が発出され、これが円形の竪穴状遺構の一部と考えられる(遺構No.20)。これより上層の土中からは各時代の遺物が出土しており、遺構の所属時期は明らかでない。確認した落ち込みの中央側にローム土粒を含む他の土層があって、別遺構の一部であるかもしれない。

出土遺物 土器は縄文土器片10数点、弥生土器片数点、土師器片10数点が出土した。1は胎土に繊維痕を有しLRの単節縄文を施す。縄文時代前期前半に属するものであろう。2は波状の櫛描文をもつ弥生時代後期土器片である。3は土師器甕の頸部、4は灰釉陶器碗の破片である。他に筒形土製品(7)が1点出土した。中世以降の土鍬かもしれない。

石器類では、石鍬などが出土している。5は黒曜石製の石鍬で、先端および両脚の先をそれぞれわずかに欠損する。石鍬としては比較的加工が粗く、特に腹面の二次加工は細くない。現在長1.4cmを測る。6はチャート製の石鍬片と考えられる。脚部破片のように観察されるが、欠損部分が多く、全体形状は明らかでない。分厚く、加工は粗いため、あるいは製作段階における失敗品であるかもしれない。他に、黒曜石製の割片4、石核1が出土している。



第30図 62グリッド平面図およびセクション図(1/40)

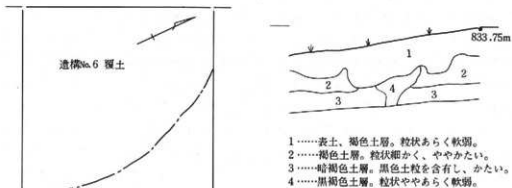


第31図 62グリッド出土遺物(1~4...1/3, 5~7...2/3)

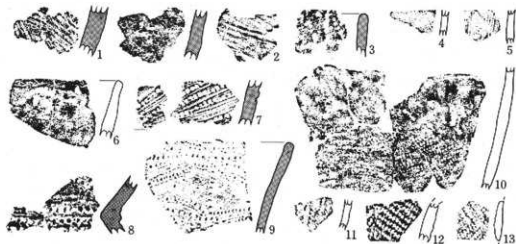
65グリッド (第32・33図)

調査状況 地表下約60cmの概ねローム上面において、円形の竪穴住居跡と考えられる遺構の落ち込みを検出した(遺構No.6)。覆土は掘り下げていないが、これより上層の土中より縄文前期の土器片が集中的に出土したことなどから、該期に所属する竪穴住居跡である可能性が高い。なお、ローム上面における原地形は南向きの緩斜面であり、この時期の住居の典型的な立地条件を充たしている。

出土遺物 土器は縄文土器のみ30片あまりが出土した。1・2は胎土に繊維痕を残し条痕を有する土器片である。1は外面に条痕を持ち、胎土には白色粒子を含む。条痕は浅く、また小片であるためその断面形ははっきりしないが、U形のようなものである。2は内面に条痕をもち外面は無文



第32図 65グリッド平面図およびセクション図 (1/40)



第33図 65グリッド出土遺物 (1/3)

である。条痕の断面はやはりU形を呈する。いずれも焼成は良好である。3も胎土に繊維痕を有する。口縁部の破片で絡状体圧痕文を持つが、圧痕は口縁直下に一列、左上がり斜めのものか施され、その下には横位に一列加えられるらしい。表面は淡茶褐色、断面は黒色である。4・5は薄手で胎土に金雲母片を含み、外面に条痕を施す。5は内面に指頭圧痕を残す。6は中薄手で焼成は大変良いが胎土に石英粒と金雲母片を多く含む。外面は暗褐色、内面は淡褐色を呈し、内面には横方向のナデ痕を残す。4～5は東海地方の影響を受けた、あるいは東海系の土器で、前期初頭に属するものであろう。7は6ないし7本の歯を持つ櫛歯状工具による条線と列点条刺突文が施される土器で、おそらく菱形のモチーフを何単位か横位に巡らせるものであろう。施文は有尾式土器に特徴的といわれるものであるが、胎土に繊維痕を有する。なお、繊維痕をもたず櫛歯状工具を縦位に用いた連続刺突文が施される口縁部の細片も1点、本グリッドから出土している。8・9は半載竹管を用いて施文されたもので、いずれも胎土に繊維痕を有する。8はやや厚手で胴部がくの字形にくびれ、口縁にかけて直線的に外反する器形であらう。くびれ部には何条かのD字形刺突列が巡る。胴部上半は半載竹管で平行沈線をひいた後に沈線間にD字形刺突を施して菱形モチーフを描くようである。胴部下半には縄文が施されるものと思われる。9はやや薄手で半載竹管により平行沈線とC形の爪形文を施す。10・11は胎土に繊維を含まず、斜縄文が施される土器である。10は破片の下半部のみ縄文が施されており、胎土に石英粒と金雲母片を含み内面に指頭圧痕が残る。外面下半にはスス、内面上半にはスス又は炭化物の付着が認められる。12・13は胎土に繊維を含まず、羽状縄文が施される。7～13はいずれも前期前半に属するものであると思われる。

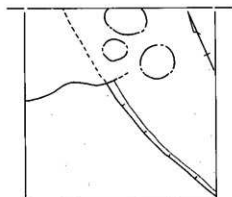
石器類としては黒曜製の剥片5点が出土している。

76グリッド (第34・35図)

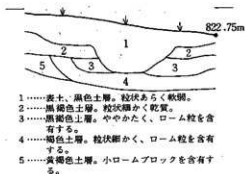
調査状況 台地東向き斜面にあるグリッドである。地表下約60cmで、ローム層上面に至る。この面を確認面として、竪穴住居状の遺構の一部を検出した。しかし、上層の擾乱が著しいため、覆土はほとんど残存せず、また遺構の一部にも破壊が認められる。壁と理解される落ち込みも現状では浅いものである。床面状の堅い面の壁より部分に、黒色土部分が3箇所あり、位置と大きさからみて柱穴と考えられるが未発掘で、確認に至っていない。

出土遺物 本グリッドからは、土器片としては、縄文早期と考えられる土器片1点と、時期不明の土器片1点が検出されている。

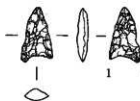
石器類では、石鏃などが出土している。1はチャート製の石鏃である。形状的には整っているが、脚部などが左右非対称である。二次加工は全面に及んでいるが、特に整微なものではない。長さ2.2cm、幅1.2cm、厚さ0.5cmを測る。その他には、黒曜石製の剥片4点が遺構確認面および第1層より出土している。



第34図 76グリッド平面図およびセクション図 (1/40)



第35図 76グリッド出土遺物 (2/3)



79・79Bグリッド (第36～40図)

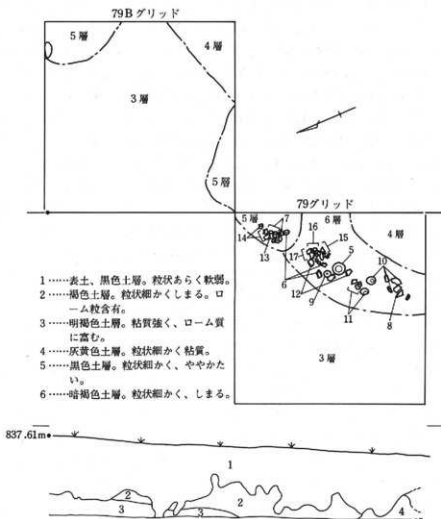
調査状況 79グリッドは台地北端、崖上の小丘よりやや南側の緩斜面にある。地表下約70cmにおいて、古墳時代の土器配列遺構（遺構No11）を発見した。この遺構の範囲を確認するため、グリッド北東側に発掘区を拡張しこれを79Bグリッドとした。ここでは両グリッドについて一括して記述する。土器群は一定の弧を描いて分布するように観察された。一部に完形品があるもの（5）多くは破損し土器片となっている。しかし大破片が多く、第36図に示すとおり接合関係もほぼ密接し、ほとんどが完形に近く復元可能であった。遺構の遺棄時には完形の土器群が配列状態で置かれていたものであることはほぼ間違いない。遺棄時に意図的に破壊されたことも考えられるが、土器群の直上まで土層の乱れがあり、攪乱の影響も強く感じられる。また、土器群の中でも複数の集中分布が認められ、小グループに分割される可能性がある。土器群を含む土層は周辺部とは異なっており、ベルト状・弧状を呈し79から79B方向の東に延びている。これより下位が未発掘で確認はできないが、浅い溝状遺構となるように観察される。また、弧の中央側には外側とはまた別の特異的な土層が分布しており、中心部側に遺構あるいは遺構に関連する施設等が存在することが予想される。土器はすべて土師器である。器種は多様だが、高坏が比率的に最も多く、坏・埴・甕・壺・坏壺などが伴う。こうした配列状態や器種内訳などから見て、遺構の性格としては墳墓・祭祀関係が予想される。諏訪地方においては、過去数例このような土器配列遺構が検出されているが、いずれも古墳の周溝内からの出土であった（本城1号墳・一時坂古墳・一時坂周溝墓等）。本グリッド例については部分的な検出であるため、確認はされていないが、諸状況からみて、墳墓の一部である可能性が最も高いであろう。

出土遺物 土器は、土器配列の完形・半完形土師器のほか、縄文土器片が10数点、須恵器片が2点と土師器片が数十点出土している。

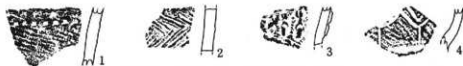
1は下半部には単節の縄文が施され、刺突列による区画の上部は無文である。焼成は良好、明茶褐色を呈する。2は半載竹管により、矢羽状の平行沈線を描く。3は半載竹管による集合沈線上に縦位の粘土紐張付を加えたうえ半載竹管で押し引きを施す。1～3は前期後半に属するものであろう。4は縄文地にY字形のモチーフを横位に連続して描く。中期初頭の土器であらう。

5～17は土器配列出土土器で、すべて土師器である。5・6は坏蓋、あるいは坏身であるが、外面の磨きの方がより丁寧であるため、蓋である可能性が高い。5は口径12.5cm、器高5.4cmで、胎土に黒色粒子・白色粒子を含み、焼成は良好、明茶褐色を呈する。稜を有し外面、内面ともナデ調整の後で横方向のヘラミガキを施す。ミガキは外面の方がやや密である。6は5よりも天井部（底体部？）が偏平で口縁部が外方にひろがる。また、やはりヨコナデの後ヨコヘラミガキを施しており、内面より外面の方がミガキが密である。胎土に黒色細粒子を含み焼成は良好、茶褐色を呈する。推定口径12.2cm。7は丸底の坏で稜を持ち、口縁に向けて外方にほぼ直線的に立ち上がる。底面はヘラケズリ後ナデられているようだが、やや磨減しており明確でない。外面の体部から口縁にかけてはヨコナデ、内面はヨコナデの後口縁部がヨコヘラミガキ、底面が一定方向の平行なヘラミガキを施す。内黒で、胎土に黒色・白色細粒子を少量含む。約3分の1個体からの復元実測で推定口径14.5cm、器高4.4cm、焼成は良好で外面は淡茶褐色を呈する。8は堦で口縁部がくの字形に外反し、体部は湾曲する。丸底を呈すると思われる。内・外面共ヨコナデの後に屈曲より下部にヨコヘラミガキを施す。胎土に砂粒・黒色微粒子を少量含む焼成は良好で淡褐色を呈するが、外面には赤褐色の斑を有する。約5分の2個体からの復元実測で推定口径12.6cm。9～13は高坏である。9は坏部が内彎しながら開くが、口縁部内面が外方に向けやや屈曲しているため口縁の断面形は尖り気味になる。口縁下の外面部ミガキまたはナゾリが特に帯状に強く施されているために口縁部の「外反的」形態が強調されている。また、ホゾ部の接合後、接合部外反に粘土を張り付けたうえで整形を行っている。脚部は外方に向け湾曲しながら開く。外面はミコヘラミガキ、坏部内面は横～斜めのヘラミガキが施されているが特に坏内面と脚部が密であり、坏部外面はやや磨減しているためか不明確である。脚部内面にはホゾの押しえ痕のほかには爪型が残る。口径13.6cm、底径8.4cm、器高8.8cmで坏部を約4分の1周欠く。胎土に細砂粒を含み焼成は良好で肌色を呈する。10も9に似た形状を呈するが、口縁部内側の屈曲と外面の帯状のミガキは9ほど顕著ではない。ただし、口縁の断面形は9よりも尖り気味になっている。外面は横方向、坏部内面は横～斜め方向の密だがやや雑なヨコヘラミガキが施される。脚部内面の外周にはミコナデが施されている。胎土に細砂粒・黒色粒子・白色微粒子を少量含む焼成は良好で、やや淡い橙色を呈する。口径13.2cm、底径9.3cm、器高8.5cmを測る。11も器形が9・10に類似するが、脚部内面（ホゾ接合部）の形態が異なる。口縁内側の屈曲と外面の帯状ミガキ又はナゾリを有し、坏部内面および外面は横～斜め方向のヘラミガキ、坏部下半にはヘラケズリ痕を残すが、全面的

に摩滅しているためあまり明確ではない。脚部内面にはホゾのナデつけ痕を残し、底面はヨコナデを行う。胎土に細砂粒・黒色細粒子を少量含む焼成は良好、やや淡い橙色を呈する。口径12.8cm、底径9.1cm、器高8.9cmを測る。12は短脚一段透かしの内黒の高坏である。坏部に稜を有し、



第36図 79-79Bグリッド平面図およびセクション図 (1/40)

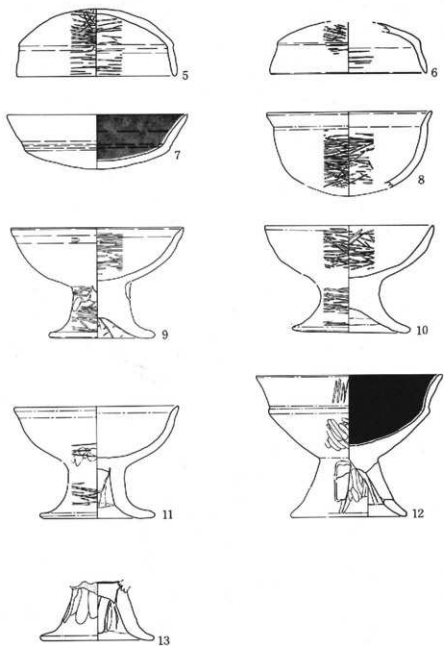


第37図 79-79Bグリッド出土遺物1) (1/3)

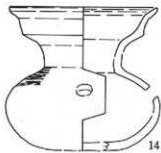
口辺部はわずかに外彎しながら外方に開く。脚部は端部がやや開く。透かしは長方形で3単位または4単位となる。外面は口辺部・脚部共に縦方向、体部下半は左上がり斜め方向のヘラミガキだが、口辺部のミガキのみが細い。坏部内面は底部が放射状、口辺部が横方向のヘラミガキを施される。口辺部のヨコヘラミガキは外面同様に細い。胎土に金雲母の細片を含み焼成は良好、外面はやや淡い茶褐色を呈する。約4分の1個体からの復元実測で、口径15.0cm、底径9.0cm、器高11.2cm。13は内黒を呈する高坏脚部で外面上半に縦方向のヘラケズリ痕を有する。胎土に白色粒子・黒色微粒子を含み、底径9.0cmを測る。14は總で約3分の2個体からの復元実測である。胴部が比較的偏平となっている。内・外面ともナデを施し、外面の頸部以下と内面の頸部～口縁近くにかけては丁寧なヨコヘラミガキを施す。特に肩部のミガキは密である。胎土に黒色微粒子を少量含み焼成は良好、茶褐色を呈する。口径11.7cm、胴部最大径12.2cm、器高11.5cm。15は壺口辺部で、横方向の密なヨコヘラミガキが施される。焼成は良好で口径9.2cm、茶褐色を呈する。16は壺の胴部であると思われる。外面には横または右上がり斜め方向の密なヘラミガキが施される。焼成は良好で茶褐色を呈する。17は器種不明の底部破片である。調整は不明、胎土に白色粒子・黒色および茶色細粒子を少量含み焼成は良好、やや淡い茶色を呈する。5・6、12・14は「系統的に追うことのできる須恵器模倣の土師器」というよりは須恵器を直接的に模倣したものであると思われるが、全体的にあまり厳密な模倣とはなっていないようである。

18は79グリッド出土の土師器高坏ホソ部破片、19は須恵器破片である。

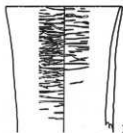
石器類はいずれも遺構に伴うものではなく、縄文時代のものが主体であろう。図示した5点のほか11点が出土している。20は安山岩製の凹石である。長さ11cm、幅7.5cm、厚さ5.7cmを測る大形品で、分厚く平面形は定形的でない。敲打痕が全面に認められ、両面に凹みを有する。21は偏平な小円礫を素材とする石錘である。硬砂石製で、長さ4.2cm、幅3.5cm、厚さ1.1cmを測る。円礫の長軸の両端に、糸かけのえぐりを数回の剝離によって作り出したもので、比較的一般な形態である。片面は無加工で自然面を広く残すが、もう一方の面にば上下からの剝離のほかに広い剝離面を有する。しかし、特に意図的なものとも思われない。22は緑色片岩製の打製石斧で、刃部のみを欠損する。現存9.2cm、幅3.8cm、厚さ0.9cmを測り、中形薄手の石斧である。二次加工は全面に渡り、背面は一部に自然面を残すもの特に整っており、腹面も刃部側がよく加工されている。23は、緑色片岩製の打製石斧の基部側破片である。幅4.8cm、厚さ1.3cmを測る。残存部分でみる限り、剝離は全面にわたっている。基部端および片側縁には折取りの加工が見られる。24は輝緑凝灰岩製のいわゆる横刃型石器であろう。長さ9.7cm、幅4.6cm、厚さ1.5cmを測る。概ね半月形を呈し、刃部は外彎するが、刃部加工は粗く精緻ではない。基部側には自然面の平坦面を残し、この面を打面とする細かい二次加工が背面側に連続的に施されている。なお、これら以外に打製石斧の制作剥片1、磨製石器の小破片1、黒曜石製のピエスエスキュー1・剥片5・石核1が出土している。



第 38 図 79・79B グリッド出土遺物 2 (1/3)



14



15



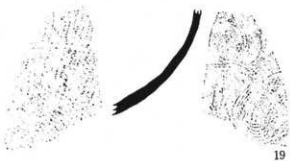
16



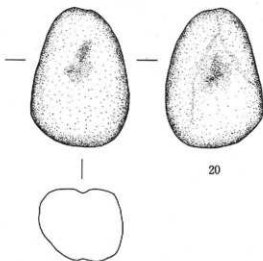
17



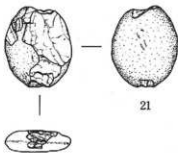
18



19

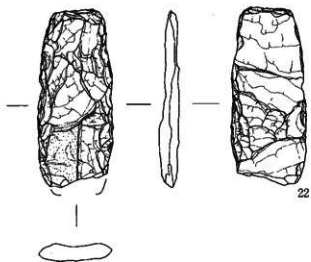


20

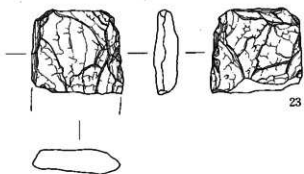


21

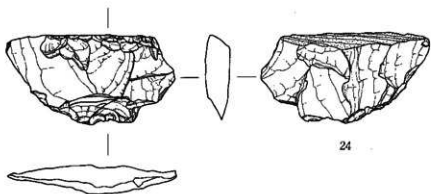
第 39 図 79・79B グリッド出土遺物(3) (14~20...1/3, 21...1/2)



22



23



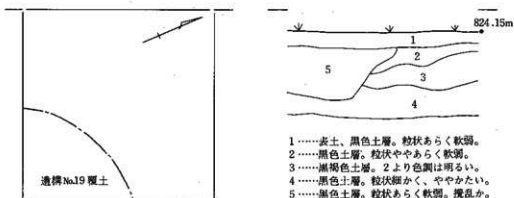
24

第40図 79・79Bグリッド出土遺物(4) (1/2)

83グリッド (第41図)

調査状況 台地東半のグリッドで、地表下約90cmのローム層への漸移層上面において、遺構の落ち込みを検出した(遺構No.19)。円形の堅穴住居跡の一部と考えられる。遺構確認面付近において若干の遺物出土をみたが、遺構の所属時期は不明である。

出土遺物 土器片としては、縄文土器片3・時期不明の土師器片5が検出された。
石器類では、黒曜石製の剥片が5点出土している。



第41図 83グリッド平面図およびセクション図 (1/40)

85グリッド (第42～44図)

調査状況 台地北端に近い南向きの緩斜面の位置するグリッドである。他のグリッドに比べると比較的安定的な土層堆積が認められ、攪乱も少ないため、遺構は良好な状態で埋没していると考えられる。地表下約60cmにおいて褐色土層に達するが、この土層に多くの縄文前期の土器片・黒曜石片・鏃の分布が検出された。こうした在り方および土質の特徴などから、本層が住居跡の覆土と判断された(遺構No.30)。出土遺物は縄文前期の全般にわたっており、遺構の細かい所属時期は現状では不明である。

出土遺物 土器は縄文土器片100数十点および土師器片数点などが出土している。本グリッド出土の縄文土器片の点数は試掘グリッド中で最も多い。そこで、本グリッド出土土器を5群に大別した。

I 群土器 早期木葉の土器

数点が出土している。

1は胎土に繊維を含み、外面には条痕文を有する土器で条痕の断面はU形を呈する。横位・斜

位方向に直線・弧線を描くが、何らかのモチーフになるかどうかは明らかでない。焼成は良好、外面は灰褐色、内面は灰茶褐色を呈する。

2は絡状体圧痕文を有する。胎土に繊維痕を残すが、絡状体圧痕は下半に左上がりのものが施され、上半には絡状体によると思われる条痕が施される。内面は無文である。

3・4は胎土に繊維痕を顕著に残すが無文の土器である。淡茶褐色を呈する。

II群土器 前期初頭の土器

細片が多いが10数点出土している。

5は厚手で胎土に繊維痕が顕著に残りおそらく波状の複合口縁を呈する土器で、口縁部の断面は尖り気味となる。LとRの2条の縄を添えた燃糸文が施されているようだが明確でない。焼成は良好で明茶褐色を呈する。

6は薄手で指頭圧痕と細線文を有する土器である。粘土紐の波状の張り付けを有する。東海地方の土器、あるいは東海地方の強い影響下に作られた土器である。ほかに無文の小片などが出土している。

III群土器 前期前葉～中葉の土器

いわゆる神ノ木・有尾式を含む関山・黒浜式併行期の土器である。

7～20・23は胎土に繊維痕をもたず、斜縄文が施される土器である。胎土に金雲母片・石英粒を含み、内面には指頭圧痕を残すものが多い。7はR、8はLの無節縄文が施される。8は特に金雲母片を多く含む。9～20は単節の斜縄文が施されるもので9～14はLR、15～20はRLの縄文を施文する。いずれも金雲母片と石英粒を含み、内面には指頭圧痕を有するが、17は特に金雲母片を多く含む上、茶色粒子も含んでおり、他とは趣をやや異にする。9は補修孔と思われる焼成後の穿孔を持つ。19の内面は篋または指頭による横方向の調整が施されている。23は土器の底部であるがRLの単節縄文を施している。

21・22も単節斜縄文を施すが、胎土に繊維痕を有している。

24～30は羽状縄文が施された土器である。24～26は無節の縄文が施される。24は口縁部の破片で繊維痕をわずかに有し縦位の羽状縄文を施すが、あるいは菱形の羽状縄文になるかもしれない。口縁部下に段を有する。26は内面に指頭圧痕を顕著に残す。施文方向を変えた斜縄文を施しているが不整であり、羽状縄文の効果を目的としたものであるかどうかは明らかでない。27～29は単節の縄文を施している。内面には指頭圧痕が残り、29は補修孔と思われる焼成後の穿孔を有する。いずれも胎土に金雲母片と石英粒を含む。

30は内・外面に無節の縄文が施される。24～29とは趣を異にし、やや薄手で胎土には多量の石英粒と少量の金雲母片を含む。焼成は良好であり外面は淡茶褐色を呈し、内面には炭化物の付着が認められる。

31は細片であるが0段3条による多条縄文又は1段2条による反撚りの縄文が施文されているようである。胎土に石英粒と金雲母片を含み、焼成は良好で内面には指頭圧痕を有する。

32は無文の土器片で、胎土に少量の纖維痕を有する。指頭圧痕が残り内外面とも褐色を呈する。

24は神ノ木式期に属するものであろう。26・27は胎土・焼成・内面の指頭圧痕など、阿久遺跡でⅢ期Ⅰ群土器とされたものと共通しており、同類であらう。

Ⅳ群土器 前後後半～未業の土器

諸磯a～c式期の土器を一括した。

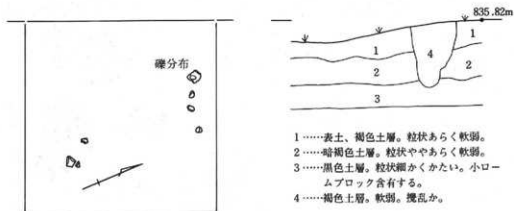
33～39は半載竹管を用いて施文されたもので、胎土に金雲母片・石英粒を含み、焼成は良好であるが胎土中に微細な気泡を有しており、やや疎な感じを受ける。また、Ⅲ群土器に比べ内面の調整は丁寧で、器面は滑らかになっている。33は口縁の無文部を残して単節縄文を施文した後、C形の押し引きを横位に何条か間隔をあけて施す。34は半載竹管で交差する条線を描いた後、条線の交点に竹管の先端で円形の刺突を加える。38・39は縄文を施した後半載竹管により平行沈線で横位の区画を引き、区画上部は縄文を磨り消す。38の縄文は明確でない。39の平行沈線はやや結節状を呈する。

40～48は単節の斜縄文が施される土器である。40～43は結節斜縄文が施される。44～48は結節を持たないが、胎土・焼成・縄文などが40～43と共通しているため同類と思われる。また、40～48は33～39と胎土・焼成・内面調整などが共通しており、同時期の所産であると思われる。いずれも諸磯a式期に属するものであろう。

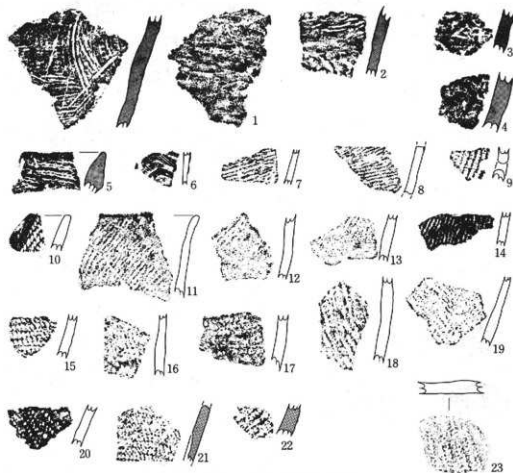
49～52は半載竹管により集合沈線が施される土器であり、いずれも焼成は良好である。49は縦および斜め方向の集合沈線が施文される。49は焼成は良好で暗茶褐色を呈し胎土に白色粒子を含む。50～52は淡茶褐色を呈し焼成は良好、集合沈線を地文として粘土紐の隆帯の張り付けが加えられ、隆帯上には半載竹管による押し引きが施される。50・51は口縁部破片で、51は粘土粒によるボタン状張り付けを有し、その上に刺突が加えられる。50は諸磯b式期、49・50・51は諸磯c式期に属するものであろう。

53～56は単節の縄文が施されるが、Ⅲ群土器であるかⅣ群土器であるか判別不明の土器である。

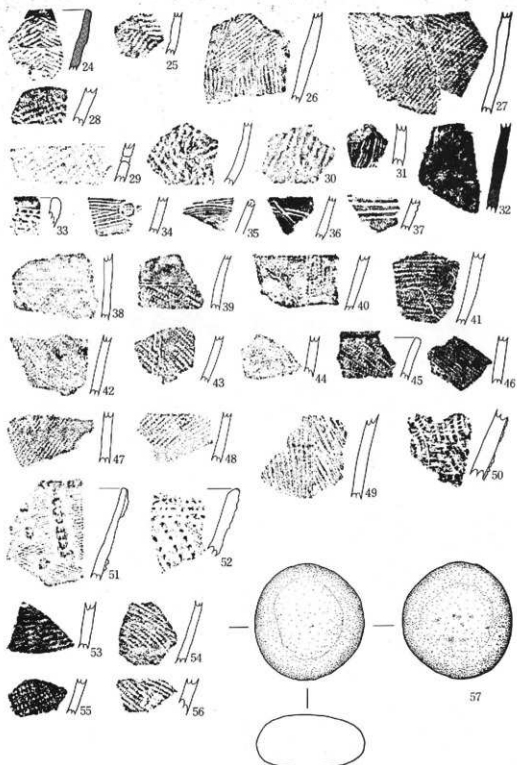
石器としては、磨石などがある。57は安山岩製の磨石である。長さ9.2cm、幅8.6cm、厚さ4.1cmを測る。平面形は円形に近く、横断面形は長楕円形で、形態的には整っている。全面の敲打痕および両面の研磨痕が著しい。とくに研磨は精緻で、両面とも平坦に磨かれている。明瞭な凹みは認められない。このほかに、黒曜石の小さい石器が数多く検出されたことが特徴的である。内訳は、剥片24・石核4・原石片5である。これらの大量出土はより下層における住居跡の存在を反映するものと理解される。



第42図 85グリッド平面図およびセクション図 (1/40)



第43図 85グリッド出土遺物1) (1/3)



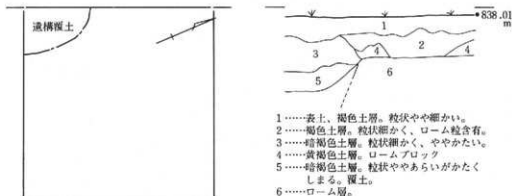
第44図 85グリッド出土遺物2(1/3)

87グリッド (第45・第46図)

調査状況 本グリッドは、台地北端の頂部に近い位置にあって、台地南端の保科畑地区を除けば、今回設定のグリッド中では、標高が最も高い。このため堆積も厚くなく約40cmでローム層に達した。この面を確認面として、グリッド西端で堅穴状と考えられる遺構の一部を検出した(遺構No18)。円形住居跡のごく一部とみられるが、全体の形状は明らかでない。覆土は黒色土で、小ロームブロックを含有している。覆土およびこれより上の土層から縄文土器片などが出土している。

出土遺物 土器は縄文土器片が2点出土している。1は半截竹管を用いて縦位の集合沈線を施文する。2は口縁部破片で、2本の沈線間に交互刺突を加える。1は前期後半、2は中期前半に属するものであろう。

石器では、黒曜石製の剥片1点が出土している。



第45図 87グリッド平面図およびセクション図 (1/40)



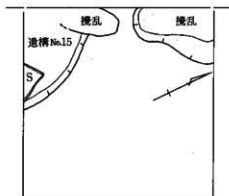
第46図 87グリッド出土遺物 (1/3)

94グリッド (第47図)

調査状況 地表下約30cmでローム上面に達し、堅穴住居跡の一部を検出した。床面の一部も見られるが上層と周辺に攪乱が著しく、破壊されているようである(遺構No15)。

出土遺物 土器片として、縄文土器片1・須恵器片1・土師器片3が出土した。

石器では、黒曜石製の剥片1点が出土している。



- 1……表土、黒色土層。粒状細かく軟弱。
- 2……明褐色土層。ややかたく、ローム粒・炭化物粒含有。
- 3……褐色土層。粒状あらい。ローム粒含有。
- 4……黒褐色土層。粒状あらく軟弱。攪乱。
- 5……黄褐色土層。ロームブロックを含有する。

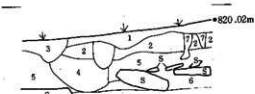
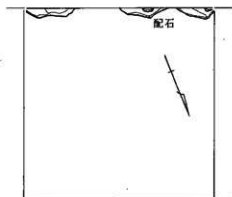
第47図 94グリッド平面図およびセクション図 (1/40)

97グリッド (第48図)

調査状況 97グリッドは台地東端に近い、東向き緩斜面に位置する。表土から遺構検出面までの土層は耕作による攪乱の影響を受けており、層位が乱れている。地表下約60cmの黒色土中においてグリッド南西辺側に3個の石による配石を検出した(遺構No.22)。石はいずれも平板状の自然石で、水平的に据えられているように観察される。付近より弥生土器片が出土している。

出土遺物 縄文土器・弥生土器・土器器片が各数点出土している。このうち弥生土器と考えられる2点はいずれも条痕文が施された土器で、胎土に砂粒を含む。

石器では、黒曜石製の剥片1と打製石斧制作剥片1が出土している。



- 1……表土、黒色土層。粒状細かく軟弱。
- 2……褐色土層。粒状あらいがやかたい。
- 3……黒褐色土層。粒状あらく軟弱。
- 4……暗褐色土層。粒状やや細かく、かたい。
- 5……褐色土層。粒状ややあらく軟弱。
- 6……褐色土層。粒状細かくかたい。
- 7……褐色土層。軟弱。攪乱。

第48図 97グリッド平面図およびセクション図 (1/40)

106グリッド (第49-51図)

調査状況 本グリッドは台地北側の頂部に近い東南向きの緩斜面に位置する。表土以下の土層に多くの縄文土器片などが出土し、住居跡等の遺構の存在が予測された(遺構No13)。一部ではあるが、床面状の堅い面も観察された。しかし、第49図に示すとおり、現代の耕作による「うね」状の攪乱が著しく、覆土を完全に破壊している。しかし、出土遺物の所属時期はやや広いこと、堅い面の下からも遺物が出土することから、複数の遺構の重複の可能性もある。

出土遺物 土器は縄文土器片が100点ちかくと弥生土器片が1点・土師器片が数点出土している。これらのうち縄文土器については85グリッドなどを参照に4群に大別した。

I群土器 早期末葉の土器

図示したものが分離し得たすべてである。

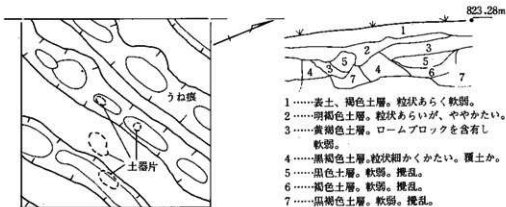
- 1は胎土に繊維痕を有し、外面には条痕が施文される。焼成は良好で淡褐色を呈する。
- 2は顕著に繊維痕を残しているため施文されているかどうかは不明である。淡茶褐色を呈する。

II群土器 前期初頭の土器

数点が出土している。

3は厚手で胎土に繊維痕を残し、複合口縁を呈する。横位の結節羽状縄文が施される。平口縁であるが波状口縁であるかは不明である。

4～7は薄手で細線文が施される。4～6は粘土紐による隆帯が加えられる。4・5は偏平な粘土紐が張り付けられ、指頭圧痕を顕著に残す。いずれも胎土に石英粒と金雲母片を含み焼成は良好で、4は茶褐色、5は淡茶褐色を呈する。6はやや丸みを帯びた隆帯が張り付けられ、縦位の条線が施せらる。波状口縁を呈し、口唇には刻み加えられる。胎土に微細な金雲母片と石英粒を含み肌色を呈する。7は斜位の沈線が何条か加えられるもので焼成は良好、胎土には微細な



第49図 106グリッド平面図およびセクション図 (1/40)

金雲母片と石英粒を含む。4～7はいずれもいわゆる東海系あるいは東海地方の強い影響下につくられた土器であると思われる。

Ⅲ群土器 前期前葉～中葉の土器

いわゆる神ノ木・有尾式を含む関山・黒浜式期併行の土器で数十点が出土している。

8・11は半截竹管を用いて平行沈線を施す土器である。両方とも胎土に繊維痕を少数残す。おそらく同部でゆるくくびれる深鉢の破片であろう。8は幅広の原体を用いている。11は菱形のモチーフが何単位か描かれるようである。いずれも焼成は良好、淡褐色を呈する。

9も胎土に繊維を含むがやや厚手である。単節の斜縄文と爪形文が施される。関東の黒浜式土器的である。

10は薄手で焼成は良好、内外面に浅い条痕を有する。胎土に石英粒を含み、外面は灰褐色、内面は黒褐色を呈する。東海あるいは西日本の土器であろうか。

12～25は斜縄文を施文する。胎土に繊維痕を有するもの(12～22)と繊維痕をもたないもの(23～25)に分類される。12～22は指頭圧痕を残すものが多い。12～18は無節縄文が施されるが、18のみは内面・外面の両面に縄文が施文されている。19～22は単節の斜縄文が施される。23～25は胎土に繊維痕を有する。いずれも焼成は良好である。

26～31は羽状縄文が施されるものである。26は無節、27～31は単節の羽状縄文が加えられるが、29・30は胎土に繊維痕を有する。31は薄手で整った縄文が加えられており、いわゆる東海系または西日本系の土器であろう。

34は特種な縄文が加えられるもので、RとLの一段の縄各1条を用いた正反の合の縄文が施される。内面には指頭圧痕が有し、茶褐色を呈する。

Ⅳ群土器 前期後半～末葉の土器

10数点が出土している。

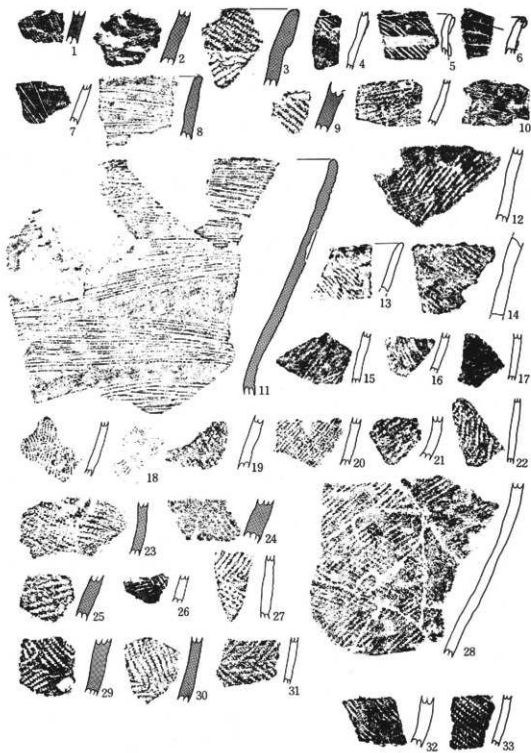
35～37は爪形文が加えられるものである。35・37は爪形文と刻みの入った隆帯が交互に巡る。

38～42は半截竹管による沈線を有する土器で、39～42は集合沈線となっている。40・41は沈線上に粘土紐の隆帯やボタン状の張り付けが加えられる。43・44は結節を持つ隆帯が加えられる土器である。45は縄文が加えられる。

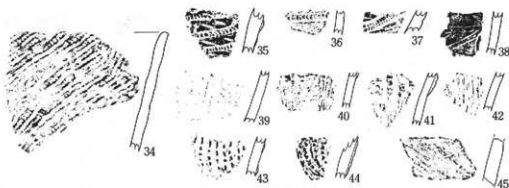
35～38・45は諸磯a、39～44は諸磯b～c式期の土器であろう。

なお、単節の斜縄文が加えられるがⅢ群土器に含まれるものであるかⅣ群土器に含まれるものであるか判別困難な土器片も数点ある(32・33)。

石器としては、黒曜石製石器がいくつか出土している。内訳は剥片6・石核1・原石片3である。



第50図 106グリッド出土遺物(1) (1/3)



第51図 106グリッド出土遺物2) (1/3)

108グリッド (第52・53図)

調査状況 台地北側先端の頂部付近の浅い谷状部分に位置する。本グリッドの土層は極めて特徴的で注目に値する。すなわち、大地の最も高い位置にあって、周囲の近接するグリッドでは例外なく黒色土の堆積が薄く、かなり浅くにローム層上面が検出されるのに対して、本グリッドに限っては黒色土が非常に深く、150cm以上掘り進んでも褐色土やローム層が全く認められないのである。確かに現在の地表でも谷にはなっているがこれはごく浅いものである。これは、地下にかなり深い谷状地形が存在することを示しており、堰など人口的な大規模遺構の可能性もある(遺構No23)。この点についての解明を目的とし、本グリッドを含むやや広い範囲にたいして、電磁波等による地下遺構の物理探査を実施した。なお結果については別章に記述した。

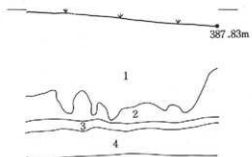
出土遺物 土器は縄文土器片・土器片・灰軸陶器片が各数点出土している。1は口唇に刻み目をもつ縄文土器の口縁部破片で、単節斜縄文を施す。胎土に白色粒子を含み、茶褐色を呈する。2・3は灰軸陶器碗で、口縁部内側に1本ないしは2本の沈線を有する。

石器では図示した1点のほか9点が出土した。4はチャート製の石器で、一種の尖頭器と考えられる。長さ4cm、幅2.2cm、厚さ1.1cmを測る完形品で、平面形は整っている。素材は剥片である。最大幅はほぼ中央部にあって、基部と先端の区別も加工状態などから明瞭である。しかし、二次加工は細かくなく背面には自然面を、腹面には素材剥片の主要剥離面をそれぞれ残している。その他、黒曜石製の剥片8・打製石斧制作剥片1が出土した。

112グリッド (第54・55図)

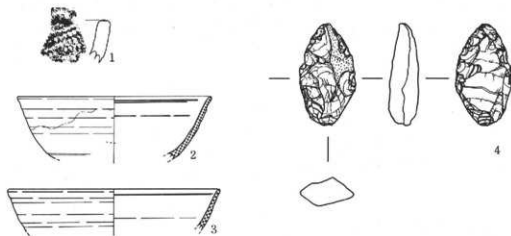
調査状況 地表下約50cmでローム層に達し、一部に堅穴状遺構の一部を確認した(遺構No12)。

出土遺物 縄文土器片が数点出土している。1は口縁部に斜めに刻みをいれた隆帯と爪形文が交互に巡らされ、その下方は地縄文に半截竹管による平行沈線文が施される。2はやはり半截竹管による平行沈線間に爪形文を施している。いずれも胎土に金雲母片と白色粒子を含む。3は胎土に砂粒・石英粒を含み茶褐色を呈する。外面には単節縄文が施文される。1～3は前期後半に属するものであると思われる。



- 1……表土、黒色土層。粒状あらく、極めて軟弱。
 2……暗褐色土層。粒状細かく、かたくしまる。
 3……黒色土層。粒状細かく、均質でかたい。
 4……暗褐色土層。粒状細かく、かなりかたい。

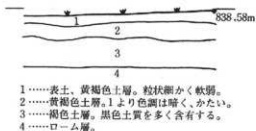
第52図 108グリッド北東壁セクション図 (1/40)



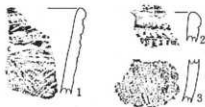
第53図 108グリッド出土遺物 (1~3→1/3, 4→2/3)



第54図 112グリッド平面図およびセクション図 (1/40)



- 1……表土、黄褐色土層。粒状細かく軟弱。
 2……黄褐色土層。1より色調は暗く、かたい。
 3……褐色土層。黒色土質を多く含有する。
 4……ローム層。



第55図 112グリッド出土遺物 (1/3)

2. その他の出土遺物

前述したグリッド以外のグリッドからの出土遺物を一括した。

(1) 縄文時代の遺物

土器

前期の土器を中心として破片のみ百数十点あまりが出土している。小片が多く、直接全体の器形を窺い知ることのできるものはない。85グリッド・106グリッド出土土器の分類基準に従い、5群に大別した。

I群土器 早期末葉の土器（第56図1）

1のみが82グリッドから出土している。

1は表・裏面に条痕を有する土器である。焼成は良好で胎土に白色粒子を含み、繊維痕を残す。条痕の凹部の断面はU形で、外面には原体の圧痕らしきものも認められるが、明確ではない。

II群土器 前期初頭の土器（第56図2・3）

一応2片を分離したが、所属時期は明確でない。

2は胎土に白色粒子と砂粒を含む。半截竹管を用いており、格子目状の条痕を描くようである。

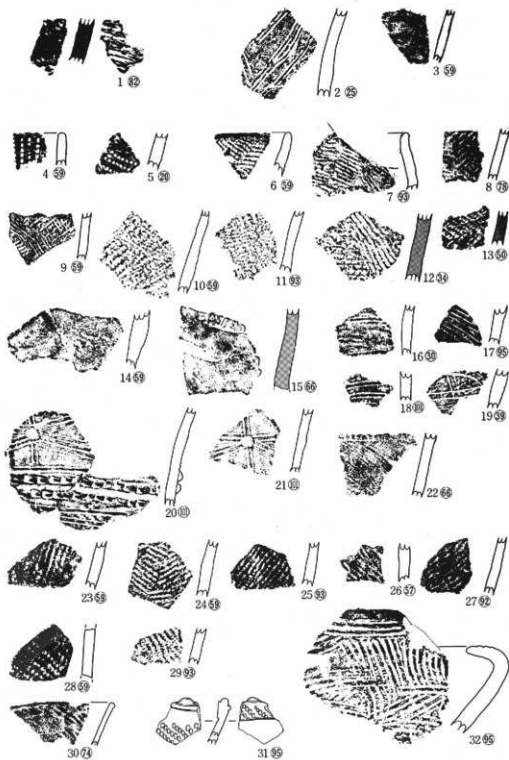
3は中薄手で胎土に金雲母片と細石粒を含むが、指頭圧痕は特に顕著ではない。外面は暗褐色、内面は褐色を呈する。

III群土器 前期前葉～中葉の土器（第56図4～15）

いわゆる神ノ木・有尾式併行の土器である。

4は櫛歯状工具を縦位に使い口縁部に連続刺突文を施す。神ノ木式土器に特徴的といわれる技法である。5はやや細か目の櫛歯状工具を用いた列点状刺突文が施されている。菱形を中心とした文様構成を持つと思われるが、細片のため不明である。いずれも胎土に繊維は含まない。

6～11は斜縄文を有し胎土に金雲母片と白色粒子を含むが繊維は含まない。内面に指頭圧痕を有するものが多い。施文が全面縄文のみで口径に比べて底径が割と小さな深鉢の破片であろう。



第56図 その他のグリッド出土土器(1) (○内の数字は出土グリッド番号を示す) (1/3)

6・7は口縁部の破片で6はLRの単節縄文を施す。7は波状口縁を呈し、口縁部近くが内屈し、Rの無節縄文を付す。8～11は胴部の破片である。8は割と薄手で明褐色を呈し、内面には炭化物の付着が認められる。Lの無節縄文を割と不定方向に施す。9は外面暗褐色、内面茶褐色で内面には指頭圧痕を顕著に残す。縄文の施文方向は一定しないが、LとRの2種類の無節縄文を施文している。10・11はRLの単節縄文を施文する。

12・13はそれぞれLの無節縄文、RLの単節縄文を施しており、胎土に繊維を含む。12は施文方向が一定しておらず、不整な羽状縄文的である。

14・15は無文の土器である。14は胎土に石英粒と微細な金雲母片を含む。厚手であるが胎土・焼成が3に類似しており、あるいはII群土器に含まれるものかも知れない。15もやはり胎土に石英粒と微細な金雲母片を含むが、繊維痕を有する。外面は丁寧に撫でられているが、内面は繊維痕が顕著に残っており粗い。

IV群土器 前期後半～末葉の土器（第56図16～32・第57図33～46）

諸磯・十三菩提式併行の土器である。

16～18は半截竹管を用いていわゆる肋骨文を描くものである。16・17は地縄文を有する。19は木の葉文的な文様を描いたものであろう。20・21は同一個体であると思われる。胴部から口縁にかけて外響気味にひろがる深鉢の胴部であろう。上半は半截竹管により*モチーフを描き、平行沈線の交点には指頭による軽い刺突を加えている。胴部上半の文様帯の下端はやはり半截竹管による平行沈線と、粘土紐の張り付けによる2本の隆帯によって区画されている。隆帯上には隆帯よりも巾の狭い竹管による押しきりが加えられる。区画の下側は縄文地に縦横の沈線が加えられている。外面は褐色、内面は茶褐色で胎土に石英粒・金雲母片を含む。22はRLの単節縄文を施したもので、横位の平行沈線とその間のC字形刺突を半截竹管で描出している。16～22は、諸磯a式併行の土器として捉えられよう。

23～30には縄文のみが施された破片を一括した。ほとんどがIII群あるいはIV群土器に属すると思われるが、小片であり明確に判別できないものである。23がLの無節縄文、24・25がLR、26～29がRLの単節縄文を施文する。30はRLの縄文を施す薄手の土器で、内面は割と丁寧になでられているが外面には指頭圧痕が残る。西日本又は東海系の土器かも知れない。

31は突起付きの口縁部破片で茶褐色を呈し胎土に石英粒と金雲母片を含む。波状口縁であるかどうかは明らかでない。外面は口縁部下に少し空白を置いて単節の縄文を施し、口縁部内側にも段を設けて縄文を施文する。所属時期は不明であり、中期～後期前葉となる可能性もあるが、胎土・焼成とも本群中の一部の土器に大変類似しているため、一応本群に含めた。

32～38は竹管による集合沈線文を主体としたものである。32は内屈する口縁部の破片で地文に縄文をもつ。内面は茶褐色、外面は暗茶褐色を呈し胎土には石英粒を含む。38は張り出し気味の

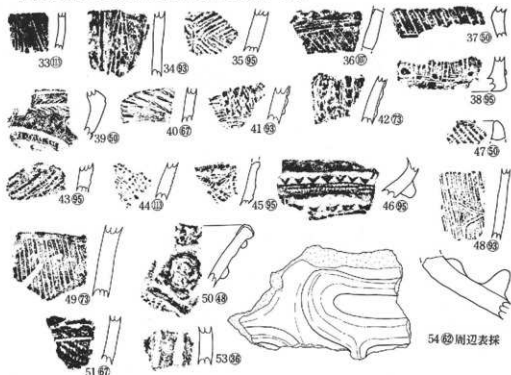
底部破片で粘土粒によるボタン状の張付を加えている。39は半截竹管や棒状工具による沈線を施した後刻み目を加える。40は細い粘土紐の張り付け後、矢羽状の刻み目を加える。41・42は隆帯よりも細い半截竹管で隆帯上に押し引きを加える。41は地文に集合沈線をもつ。43～45はいわゆる結節状沈線文の土器で、45は空白部を棒状工具のようなもので削り取っている。32～34・39・40は諸磯b式、41～45は諸磯c式期であろう。他も同時期の所属であると思われる。46は十三菩提式併行の土器である。

V群土器 中期の土器 (第57図47～54)

量的にはあまり多くなく、20片ほどが出土している。

47は格子目状の集合沈線を施す。中期初頭に属すると思われる。49は中期中葉の深鉢の胴下半部であろう。54は隆帯で施文される土器片で、部分的に耳タブ状に隆帯を突出させるが胴部の隆帯は断面三角形を呈する。色調は外面が暗褐色、内面が明褐色で、有孔罅付土器の破片である可能性がある。50・51は地文に縄文を施す。50は粘土紐の張り付けによる隆帯で施文される口縁部の破片で焼成は良好、胎土には金雲母の細片を含む。53は指頭のナゾリにより沈線を描出し内・外面とも滑らかである。50・53は中期後半に属するものであろう。

後晩期に属すると思われる破片は検出されなかった。



第57図 その他のグリッド出土土器(2) (○内の数字は出土グリッド番号を示す) (1/3)

石器 (第58図～60図)

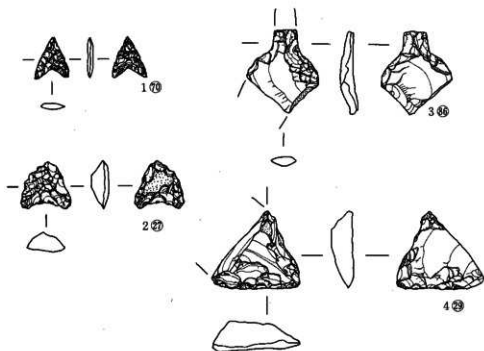
各グリッド出土の石器については表4 (P57) にまとめたので参照されたい。ここでは、遺構検出グリッド以外から出土した石器類のうち定形的石器など主なものについて、図示し概述することにする。

1は黒曜石製の石鏃である。長さ1.6cm、幅1.3cm、厚さ0.3cmを測る。二次加工は極めて精緻で、両面とも全面にわたって細かい剝離が施されている。平面形、断面形ともによく整い、特に薄く断面凸レンズ状に成形されているのが特徴である。

2は黒曜石製の石鏃である。長さ1.9cm、幅1.9cm、厚さ0.7cmを測る。横断面形は背面側に外彎し、腹面側は平坦で自然面を広く残し、片面加工的である。二次加工は背面の全面と腹面の周縁に施されているがやや粗略で、あまり細かくない。平面形も左右対称でない。

3は珪質頁岩製の石器である。薄い剝片を素材とし、一部に突出する細長い加工部分を有する。この部分の先端と体部を広く欠損するため、全体の形状などは明らかでない。細長い作り出しの部位の加工は細かい剝離が連続して施されており、ここがこの石器の主要使用部位であることが予想される。この加工および体部にかけての肩の加工状態は石鏃などに一般的に認められる。本資料も石鏃である可能性が高いが、鏃部分が非常に薄く仕上げられている点など、若干疑問が残る。

4はチャート製の石器である。分厚い剝片を素材とし、周縁に二次加工を施したものであるが、



第58図 その他のグリッド出土石器(1)(2/3、○中の数字はグリッドNo.)

半分以上を欠損するため、形状は明らかでない。しかし、残存する一縁には両面にわたって比較的精緻な小剥離が連続的に行われていて、これはいわゆる刃部加工のように観察される。この縁辺を使用部位とする一種のスクレイパーと考えられる。

5は打製石斧の破損品であろう。基部と刃部を欠損し、現存長9.8cm、幅4.4cm、厚さ1.7cmを測る。結晶片岩製である。背面、腹面ともに一次的な剥離面を広く残し、二次加工は背面の片側縁と腹面の両側縁に施されている。製作時における破損も考えられる。

6は緑色片岩製の打製石斧である。長さ7cm、幅5.7cm、厚さ1.5cmを測る。定形的だが、幅に対して長さが短い形態である。両側縁および基部は折取りによって粗く成形され、二次加工は背面側のみ施されている。刃部加工は両面に行われているが背面側より細かい。刃部先端は両面とも磨耗が著しく使用の痕跡が明確に認められる。

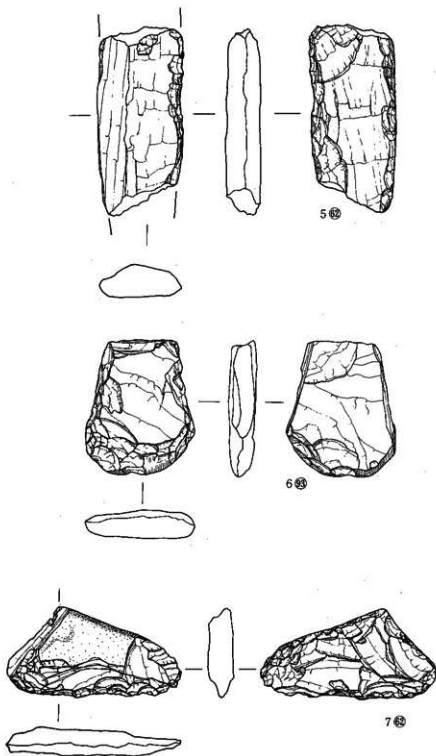
7は輝緑凝灰岩製のいわゆる横刃型石器である。長さ9.1cm、幅4.7cm、厚さ1.5cmを測る完形品である。背面側の一部に自然面を残すものの二次加工はほぼ全面に及んでおりよく成形されている。平面形は三角形に近い形状に意図されているようである。刃部は直線刃で、刃部加工は両面に施され、細かい剥離が連続的に加えられている。基部側の加工は背面側には少なく、腹面側に集中している。

8は磨製石斧の基部破片である。素材は蛇紋岩である。やや大形の定角式石斧と思われるが、体部および刃部を大きく欠損する。加工状態は良好で、極めて入念に成形されている。両面、両側縁とも平坦で、表面は十分に研磨されている。基部端に小剥離痕跡があるが、つぶれもあり、使用時の破損とも考えられる。

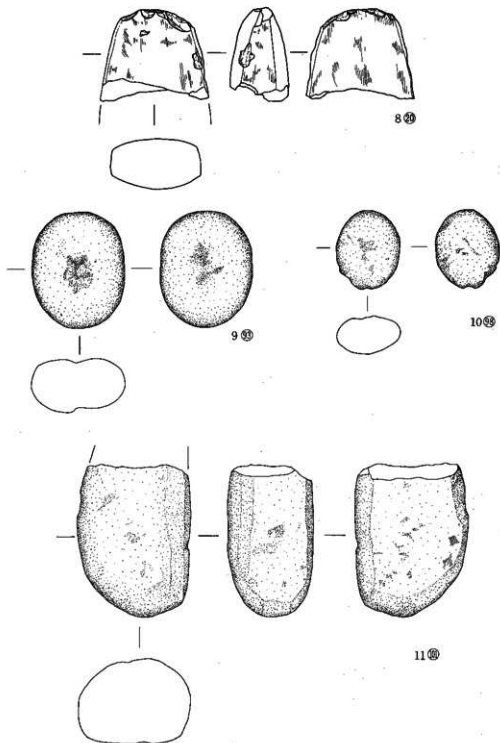
9は、定形的な凹石である。安山岩製で、長さ9.2cm、幅7.3cm、厚さ4.3cmを測る。よく成形加工され、平面形は整った楕円形を呈する。全面に敲打痕と研磨痕が認められる。凹みは両面中央部にやや浅めに観察される。

10は、小形の磨石である。安山岩製で、長さ6.2cm、幅5cm、厚さ3cmを測り、この種の石器としてはかなり小さい部類に属する。両面ともよく成形加工され、片面の中央部には浅い凹みも認められる。

11は、安山岩製の磨石である。半欠品と思われる。現存長12cm、幅9cm、厚さ6.8cmを測り、大形品である。全面がよく敲打、研磨されているが、とくに片面と片側面は平坦に磨かれている。外彎するもう一方の面と平坦な側面には、中央に浅い凹みが認められる。



第59図 その他のグリッド出土石器(2) (1/2)



第60図 その他のグリッド出土石器(3) (8…1/2, 9~11 1/3)

(2) 弥生時代の遺物 (第61図55・56)

中期の土器など数点が出土している。

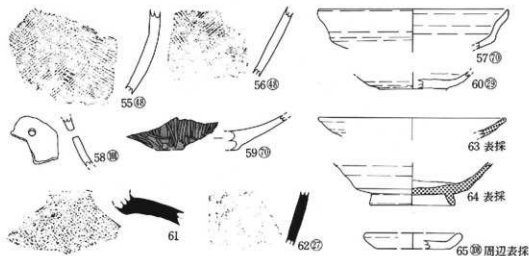
55・56は同一個体で、綾杉状の襜褸斜状文を施す甕の胴部破片である。暗褐色を呈し胎土に石英粒を含む。

(3) 古墳時代以降の遺物 (第61図57～65)

土師器片を中心に数十点出土しているがほとんど細片である。

57は体部下半に稜を有する高坏又は坏の破片で、明茶褐色を呈し、内・外面ともヨコ方向のヘラミガキを丁寧に施す。口縁部は内彎する。58は円孔をもつ高坏の脚部と思われる。59は器種不明で外面はヘラミガキが施され黒色を呈するが、あるいは黒斑であるのかも知れない。内面はナデが施され、焼成はよい。60は坏底部で、回転糸切り痕を残す。胎土には白色粒子を含み焼成は良好で、表面は暗青灰色に黒斑を有するが断面は茶褐色を呈する。61・62は須恵器、63・64は灰釉陶器破片である。63は皿の口縁部であろう。64は高台を有する碗で、底部近くに回転ヘラケズリ痕を残す。いずれも焼成良好で、64は胎土に1mm以下の黒色粒子を含む。65はかわらけで、回転糸切り痕を残す。胎土に1mm以下の白色粒子・砂粒および微細な金雲母片を含み、灰褐色を呈する。

他に中・近世又は近代以降に属すると思われる陶磁器片が数点出土している。



第61図 その他のグリッド出土土器(4) (○内の数字はグリッド番号を示す)

表1 各グリッド出土遺物一覧表 (石器)

グリッド	小形石器				石 錘	打製石斧	横刃型石器	磨製石斧	凹石磨石	砥石	打製作石斧等	チャット 削片	黒曜石			合計
	石鏃等	石錐等	ピスキュー	その他の石片									削片	石核	原石	
14													3			3
20				1				1				1				3
27	1														1	2
28															2	2
34													2			2
35						1			4				7			12
36													3		1	4
39															2	2
43													1	1		2
44													1			1
46													3	1		4
49										1			1			2
50													1			1
51									2				5	1	3	11
56									2				1			3
58		1											5			6
59													3	1	2	6
60							1						2		1	4
62	2		1			2							5	1		11
63											2					2
65													5			5
66													2			2
70	1												1			2
73												1				1
76	1												4			5
78													2			2
79-79B			1		1	2	1	1	1		1		6	3		17
83													6			6
85								1					25	4	5	35
86		1											1			2
87													1			1
93				1		1			1				1	1		5
94													1			1
95				1							1		2			4
97											1		1			2
98				1					1				8			10
101									1				1			2
106													6	1	3	10
108	1		2										6			10
合計	6	2	4	4	1	7	1	3	13	1	5	2	122	14	20	205

表2 各グリッド出土遺物一覧表(縄文土器)

グリッド No	遺 構 No	早 期 末 葉	前期初		前期前葉～中葉				前期後半				前 期 末 葉	中 期 ・ 後 期	他 ・ 不 明	合 計	
			縄 文 含 纜 維	織 維 な し	櫛 歯 状 工 具	爪 形 文	平 行 沈 線	縄 文	縄 文 含 纜 維	そ の 他	諸 磯 a	諸 磯 b					諸 磯 c
14	—						1								7	8	
20	—			1			1									2	
21	4						1								3	4	
25	—						3	1	1						1	6	
27	—						1							1	1	3	
28	3														1	1	
29	9														1	1	
30	—									2					2	4	
32	—														6	6	
34	—							1	1						1	3	
35	5								1							1	
36	—												1			1	
37	8							1								1	
39	—						1			1					4	6	
43	24						3			1	1	1			4	10	
44	17						1									1	
46	—						3	2	1	2	2	2	4		16	32	
48	—														1	1	
49	1	1							2						1	4	
50	—							1		1	1	1		1	2	7	
51	7						2	1		10	7	1	2		1	10	34
57	—								1							1	
58	16			1						2					4	7	
59	—			1	1		5	1	2	3					4	17	
60	—						1			1				1	3	6	
62	20			2				1	1			1		1	6	12	
65	6	9		5	4	1	14	3	5	5				4	50		
66	—						1		1			1				3	
67	—								1			1		1		3	
69	—								1							1	
70	—														1	1	
73	—						2					1			1	4	
74	—																

グ リ ッ ド No	遺 構 No	早 期 末 葉	前期初		前期前葉～中葉					前期後半				前 期 末 葉	中 期 ・ 後 期	他 ・ 不 明	合 計	
			縄 文 含 織 維	織 維 な し	櫛 歯 状 工 具	爪 形 文	平 行 沈 線	縄 文	縄 文 含 織 維	そ の 他	諸 磯 a	諸 磯 b	諸 磯 c					諸 磯 b ・ c
76	21	1								1						1	3	
78	—									1							1	
79・79B	11										2	1	1	1		5	6	16
82	—	1														1	2	
83	19		1	1										1		16	19	
85	30	4	2	13				44	9	42	26	5	3	2		39	189	
86	—									1						1	2	
87	18												1		1		2	
93	—									5	1	1	1		2	9	19	
94	15									1							1	
95	—							1	1		2	6	1	2	1	1	5	20
97	22		1								1						2	
98	—			1						2	1					2	6	
101	—										1	1				2	4	
104	—															3	3	
106	13	1	1	8		2	2	20	8	24	1	3	3	3		13	89	
107	—											1				1	2	
108	23											1				7	8	
112	12										1	2				1	4	
113	—											1			1	2	4	
表採																3	3	
合計		17	5	32	6	3	2	102	33	95	63	33	17	18	1	17	196	640

注1. 前期前葉～中葉の「その他」には、単節縄文が論文されるが諸磯a類との判別が困難なものも含まれる。

表3 各グリッド出土遺物一覧表 (弥生時代以降)

グリッド No	遺 構 No	弥生土器			須恵器			土 師 器				灰 釉 陶 器	陶 器 ・ 磁 器	他 ・ 不 明	合 計
		甕	壺	他	不 明	甕	坏	他 ・ 不 明	甕	坏 ・ 皿	高 坏				
2	27								1						1
6	—							1							1
8	26							4		1		18	1		24
14	—												1		1
18	2							9	18		7	30	7		71
20	—							1	1			3			5
21	4	1						1	1			3			6
25	—							1							1
27	—								1			3			4
28	3				1			8	16	2	3	22	2	8	62
29	9	1				2		1		2		10			17
30	—							1							1
32	—										1	1			2
33	—							1							1
34	—							1	2	2		8	1		14
35	5	3			4		1	1	31	6	1	6	45		98
36	—												1		1
37	8										1				1
42	—											1			1
43	24					3		2	2			4			11
44	17							1	3	2					6
48	—	4							2			3			9
49	1							1				13			14
51	7								7			7			14
58	16					1		1							2
59	—							1	1			2			4
60	—											1			1
62	20	1						7				14			22
66	—								1						1
67	—								1						1
69	—							1				2			3
70	—					1									1
73	—												1		1
79	11							1	4	4	1	4	35		49
79B	11					1				1	1	3	2		8

グ リ ッド No	遺 構 No	弥生土器				須恵器			土 師 器						灰 釉 陶 器	陶 器 ・ 磁 器	他 ・ 不 明	合 計
		甕	壺	他	不 明	甕	坏	他 ・ 不 明	甕	坏 ・ 皿	高 坏	「かわらけ」 他	不 明					
82	—									1	1		3	1			6	
83	19									1			4				5	
85	30												4		1		5	
86	—												1				1	
94	15						1		1				2				4	
97	22	2							2	2			2				8	
98	—							1		3			9		1		14	
101	—									1							1	
104	—				1												1	
106	13				1				1				2				4	
107	—												1				1	
108	23								2				2	5		1	10	
114	—														1		1	
表探						1		4	1	2			10				18	
計		12	0	0	7	9	2	5	84	72	19	16	10	268	8	25	1	538

- 注1. 複数の破片から復元された土器の数も1としている。
 2. 土師器の「坏・皿」には、明確に分離し得なかった高坏および「かわらけ」の破片も含まれているものと思われる。
 また、細片であるため弥生土器であるか土師器であるか判別できなかったものは土師器の「不明」に含めた。

V. 地下遺構物理探査の結果

1. 調査の概要と方法

武居畑遺跡は縄文時代以降の各時代の出土品が存在しており、各時代の遺構（集落遺跡）が重複、密集していると考えられている。この遺跡では、つば堀りによる部分発掘が行われており、その中の1点のみがローム層の確認ができなかった結果になっている。今回の調査は、この特異な地点の周囲において物理探査を実施し、地下に埋蔵されている遺構の分布を把握するための基礎的な資料を得ることを目的とする。

・調査地　；長野県諏訪市大字中洲神宮寺地先

・調査内容及び数量　；　・比抵抗マッピング　　960点 (897m²)
　　　　　　　　　　　　・地下レーダー探査　　18測線 (延長368m)

・調査員　；坂山利彦、長田正樹、田村晃一、利岡徹馬

今回調査に用いる物理探査手法は、地表面から測定する非破壊の手法であり、遺構、地表面形状に何ら手を加えるものではない。

物理探査によって得られる地下の情報は、現在あるがままの地盤状況を反映したものであり、これらの情報を総合的に判断することによって、遺構の分布をある程度推定することが可能となる。今回は、遺構の分布を反映した地盤状況の把握を目的に、比抵抗マッピングと地下レーダー探査による調査を実施した。

比抵抗マッピングは、地盤の面的な比抵抗分布をとらえる探査法である。一般に、地盤の比抵抗は、土の種類や間隙率、含水率などによって変化するため、比抵抗の変化によって地盤内の土質変化を推定することができる。土の種類では粘土分の多い土ほど比抵抗は小さく、砂分の多い土ほど比抵抗は大きい。また、間隙率が小さく含水率が大きいものほど比抵抗は小さくなる。従って、地盤の比抵抗は自然の地積、侵食作用、地下水分布のほかに、耕作地、道路といった現地盤の利用状況はもちろん、遺構の分布状況にも左右される結果となる。

地下レーダー探査は、設定した測線下の地盤内にある電磁波の反射体を検出する探査法である。地盤中に存在する電磁波の反射体としては、空洞、金属体、あるいは地下構造物等の埋設物や、顕著な地層境界面などがあげられる。遺構の中には、このような反射体を含むもの、あるいはその原因となっているものが少なくなく、得られた記録はそれを反映したものとなる。

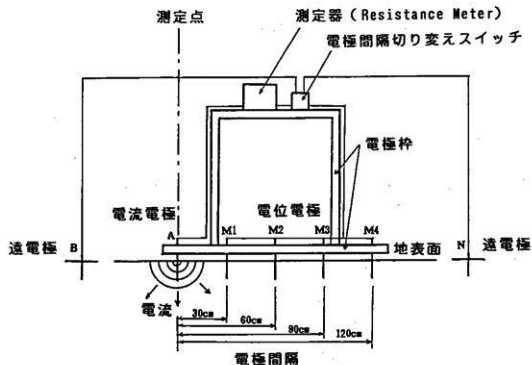
・比抵抗マッピングの測定装置と方法

比抵抗マッピング測定装置は第62図に示すように電流 I 、電位 V を測定してその比 $R = V / I$ を表示する Resistance Meter と、地表に電極を設置する電極枠から成っている。

電極枠には1本の電流電極と4本の電位電極が取付けてあり、電流電極と電位電極の間隔を0.3、0.6、0.9、1.2mの4通りで測定できる。

比抵抗マッピングの測定点は調査地全域を面的に網羅するために、1mないし、2m格子に設定する。そのため、測定に先立ち測定点の位置出しのための測量が必要である。次に充分遠方に、電流、電位電極各1本(固定)を設置し、それらをケーブルで測定器に接続する。測定は各測定点毎に測定機を移動、設置し、0.3、0.6、0.9、1.2mの各電極間隔ごとの測定値を各々記録するものである。

測定値 ($R = V / I$) を見掛け比抵抗値に換算し、各深度ごとに見掛け比抵抗分布図を作成する。これによって、各深度ごとの概略の比抵抗分布状況や、深度による違いが把握される。そしてさらに、全深度のデータを用い想定している深度面での比抵抗値を計算し、その分布図を作成する。遺構などの地盤構造の違いは、比抵抗の著しい高低差や急激な変化をもたらすため、そのような地点に着目し地盤状況を把握する。なお、これらの解析には、計算機を使用する。



第62図 比抵抗マッピングの測定装置

・地下レーダー探査の測定装置と方法

本調査において使用する地下レーダーシステムは、地表から地中に向けて電磁波を放射し、その反射波を捕えることにより、浅部の地下構造、または空洞、埋設物等の地中に存在する異物を非破壊的に探査する装置である。装置は第63図に示すように電磁波を送信・受信するためのアンテナ、送信アンテナにエネルギーを供給したり、受信アンテナが捕えた信号の増幅フィルター処理などを行うコントローラー、及び受信信号を可視記録として出力するグラフィックレコーダーから構成される。

送・受信アンテナの間隔を一定に保ったまま、一対のアンテナを一定速度（およそ1m/10秒）で移動させながら、設定した測線上を連続的に測定する。この方法により得られる記録は、横軸が水平距離、縦軸が反射時間で、反射時間は深度に換算できるので、地下の断面に類した記録となる。反射面までの深度をD、送・受信アンテナの間隔をXo、地下における電磁波伝播速度をVとすると、反射時間（往復走時）Tは次のようになる。

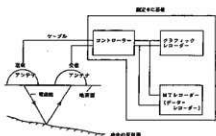
$$T = \frac{1}{V} \sqrt{X_o^2 + 4D^2}$$

したがって、

$$D = \frac{1}{2} \sqrt{(TV)^2 - X_o^2}$$

ここでTは記録から読み取ることができ、Xoは既知であるから、Vがわかれば反射面の深度Dが求められる。

得られる記録は、横軸が水平距離、縦軸が反射時間（往復走時）である。反射時間は深部の反射体ほど大きくなるため、記録は一種の深度断面と見ることができる。反射波は3～4波を一組としてその連続性を見てゆき、この連続した反射波を境界面として考える。埋蔵物などの異物が地中に存在すると、この連続した反射波がとぎれて双曲線などの強い反射パターン（アノマリー）となって記録上に現われることが多い。遺跡調査では解析の際に、特に反射波の連続性、反射記録の形状に着目して記録を判読し、反射面の起伏や反射体の分布を断面図や平面図に整理して、遺跡の埋蔵状況を推定する。



第63図 地下レーダーシステム概念図

2. 調査結果

今回実施した調査の範囲を第64図に示す。比抵抗マッピングは897㎡の範囲を1m格子(計960点)で測定した。また、地下レーダー探査は、18測線(総延長368m)を設定し測定した。以下ではこれらの測定結果について述べる。

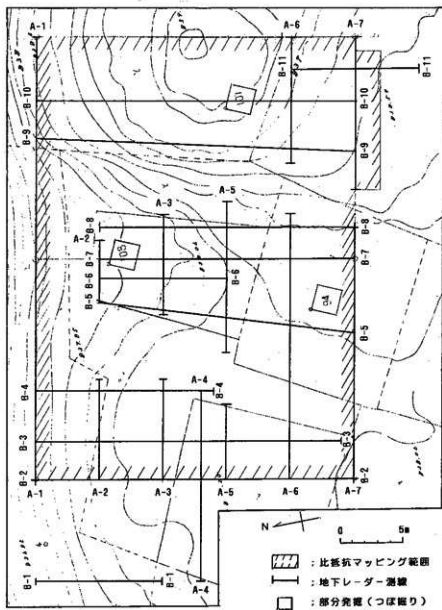
・比抵抗マッピングによる結果

地盤の比抵抗測定は、各格子点ごとに0.3m、0.6m、0.9m、1.2mの4深度の測定を行った。同一深度での見掛け比抵抗の平面分布をカラー表示したものを巻頭グラビアに示す。このカラー表示では色調が赤いものほど、見掛け比抵抗が高く、青いものほど、見掛け比抵抗が低いことを表している。各深度ごとの見掛け比抵抗分布を比較することによって、極く浅い所の土質変化に起因するものと、比較的深い所まで土質が変化しているものとを分離して考えることができる。さらに、4深度の全測定結果より深度0.75mの比抵抗分布を計算すると、巻頭グラビアに示す結果となる。堀などのように直線的な連続性を有する遺構は、堀の内部に堆積した土の違いによって、比抵抗分布としても直線的な連続性をもって表われることになる。また遺構の境界付近は比抵抗の急変するゾーンで縁どられることもある。このような観点から巻頭グラビアを見ると、全体的には東側が高く、西側で低くなっている傾向がみられる。そして特に特徴的なのは、中央よりやや東で南北方向に幅3～5mで極めて高いゾーンが分布していることと、西半分の北側よりには東西方向に幅8mほどの低いゾーンが分布していることである。なお部分発掘の結果ローム層が確認されなかった地点は、このゾーンに含まれている。この北側の調査範囲の縁にあたる部分は高比抵抗のゾーンとなっている。

・地下レーダー探査による結果

地下レーダーの測線は第64図に示すものである。調査地内には桑畑が部分的に存在し物理的に地下レーダーのアンテナを引けない場所があった。そのため全域を網羅した測定にはなっていない。

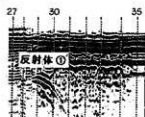
測定結果としては、局所的に埋蔵している反射体をいくつか検出することができた。それらの位置を第65図中に示す。反射体の原因としては、測定方法で述べたようにいろいろあり、最近埋められたゴミの可能性が高い。第65図に反射体をとらえた記録例を示す。今回の調査では、遺構の形状を反映した地層境界面は、記録に表われていない。



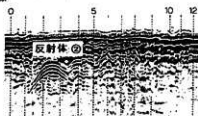
第 64 図 調査範囲及び地下レーダー測線位置



A-3 測線



A-7 測線



第 65 図 反射体位置および地下レーダー記録例

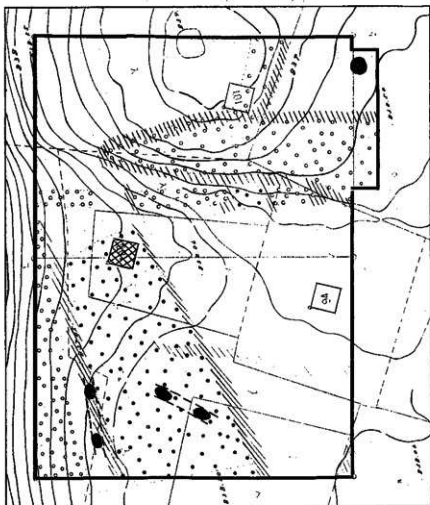
3. 調査結果の検討

比抵抗マッピングおよび地下レーダー探査の結果により調査地内をゾーニングすると第66図のようになる。低比抵抗を示すゾーンは、粘土をより多く含む土壌であり、堀などの底であった可能性がある。また、高比抵抗を示すゾーンはより砂礫質の土壌であり、人工的に盛られ、締め固められた可能性がある。いずれにしろ、これらのゾーンは5m～8m程度の中をもって分布している様子が明らかである。また、地下レーダー探査で検出された局所的な反射体のうち北側にある2地点は、比抵抗ゾーンの境界にあたり、石組等の遺構の一部である可能性がある。そうすると、この2地点から図中破線のようにのびる遺構の一部であるとの可能性も生まれてくる。その南側にある2つの反射体についても、局所的なものとは限らず破線に示すような大きさをもつ可能性もある。

部分発掘の結果ローム層が確認されなかった地点(108グリッド)は、かつて深く掘りこまれ、より低比抵抗の粘土等が堆積し、やがて埋められていったことが予想される。このことは、この地点が低比抵抗ゾーンに含まれていることと調和的である。低比抵抗ゾーンがすべて堀であったとすると、その堀は部分発掘の地点(108グリッド)あたりから8mほどの幅で西方にのびていると推定される。

今回の物理探査により、調査地での地盤状況の概略が判明した。現地表面の状況は、調査地全体で大きな差がみられないことから、ここで明らかになった地盤状況の変化は、地中に埋蔵されている遺構の分布を反映したものと考えられる。今回の探査は、試掘調査によってローム層が確認できなかった地点(108グリッド)を中心に35m×25mの限られた範囲で実施したが、遺構の分布状況をよりの確に把握するためには、今後さらに、広範囲の探査が必要と思われる。また、今回の調査地内の比抵抗分布の特異な地点(高低の比抵抗ゾーンなど)や、地下レーダー探査による反射体等を重点的に発掘調査することによって、面的に実施した物理探査結果に的確な解釈を与えることが可能と考えられる。

なお、本章の記述は、応用地質株式会社作成の「武居畑遺跡地下遺構物理探査業務報告書」を編集者の責任において抜粋し、図版番号・文末表現などについて加筆訂正を行ったものである。



- ◻◻◻◻ : 低比抵抗ゾーン
- ◻◻◻◻ : 高比抵抗ゾーン
- //// : 比抵抗急変帯
- : 地下レーダー探査による反射体
- ◻ : 部分発掘（つぼ掘り）
- ◻◻ : 部分発掘のうちローム層を
確認できなかった地点

第 66 図 物理探査結果

VI. 調査のまとめ

1. 各時代の遺構・遺物分布について

本調査で検出された遺構・遺物の詳細については、これまで述べてきたとおりである。ここでは、遺構および遺物の分布の概要についてまとめ、現段階における集約結果としたい。

第一に指摘しておかねばならないのは、遺物分布の広範囲性である。50,000m²近くにも及ぶこの広い台地のほぼ全域から遺構が出土していることは注目に値する。当初の予想通りの大遺跡であることが改めて確認された。また、遺跡立地が比較的平坦な独立した台地上であることから、この地理的条件によって、各時代における占有領域が明確に台地内に限られていることが予想される。このことは、各時代の遺跡構造などを把握する上では有利な条件である。

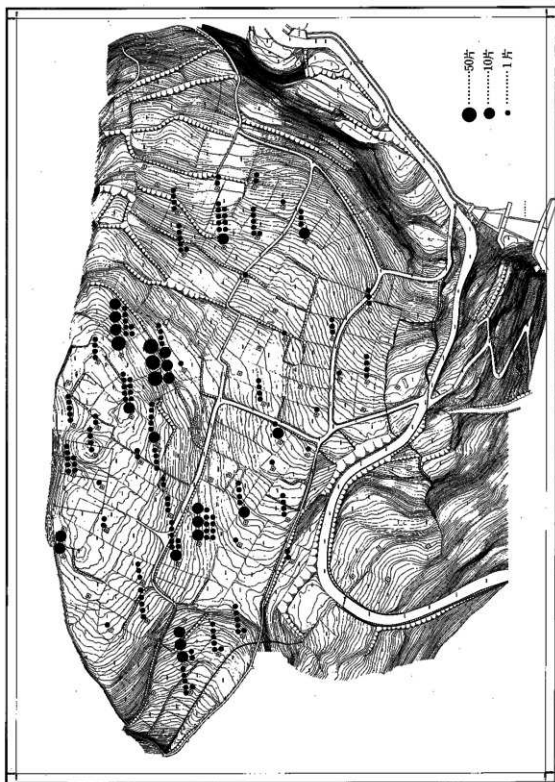
次に所属時代時期であるが、これもかなりの長期間に及んでおり、重複遺跡である。特に濃密な遺構分布が予想されるのは、縄文時代早期から前期・弥生時代・古墳時代・平安時代・中世などである。このうち縄文時代早期末から前期初頭については、明確な遺構が検出されず遺跡の性格は明らかでないが、遺物分布は広範囲である。縄文前期についてはいくつか住居跡などが検出され、大規模な集落遺跡であると考えられる。縄文時代の遺物分布は第67図に示した。本遺跡における縄文時代遺物の大半は前期前葉から後葉に属するものであり、この遺物分布は概ね該期の遺構分布を反映している可能性が高い。この分布をみると、台地北半の小丘を囲む南および南東向き緩斜面に帯状もしくは弧状に延びている。これはこの時期の一般的な集落立地に共通しており、本遺跡でもこの時期の大規模な集落の存在が想定できる。

弥生時代の遺物は量的には他の時代より少ない。分布は広範であるが、台地中央の谷状地形部分が比較的多いとみられる。

古墳時代についてはやはり全域から出土するが、台地北半により濃密である。79グリッドからは祭祀的性格の考えられる土師器配列遺構が検出された。また過去の採集資料などによると鉄製の直刀や勾玉などが複数出土している。こうしたことから見て、この時期においては集落ではなく台地上に複数の古墳などが所在する可能性がきわめて高い。本遺跡に隣接する山麓上の他遺跡では同様の立地条件の下、多くの古墳が存在しており、この想定を裏付けている。

平安時代の遺物は台地全体から広く出土するが中央部の谷状地形に窪地により濃密である。竪穴住居状の遺構もいくつか確認されており、広い範囲に集落が営まれていたものと考えられる。

中世の遺物は台地南端の保科畑地区およびこれよりやや下の蛭子社地区周辺が最も多い。過去の調査でも同様にこの地区から多数のかわらけなどが出土している。遺構としても、保科畑地区



第 67 图 出土器物分布图 (绳文土器)

では溝状遺構が、また蛭子社地区周辺でも床面状などの遺構が検出されている。保科畑については古くから居館跡の存在が予想されており、これを裏付ける一資料と理解することができよう。また、蛭子社地区については過去の調査や採集では祭祀の色彩が感じられており、あるいは現在の諏訪神社による蛭子社祭祀となんらかの関連を有するものである可能性も否定できない。

今回の試掘調査においては物理探査を併用した結果、本遺跡における大規模遺構の存在の可能性が非常に高いものとなった。物理探査区域において行った比抵抗マッピングと地下レーダー探査では、地下に堀状および石垣状であると思われる遺構が埋没していることが想定され得る結果が出ている。これらはその規模と形状から明らかに人為的なものであると思われるが、性格についてはまだ不明である。しかし、中世の遺物が多く出土していることなどから、居館跡などである可能性が高いといえ、武居城跡との関係など興味深い点が多い。今後の検討課題であろう。また、今回のような大規模遺構の確認のみについていえば、これらの非破壊的な調査も試掘坑(溝)による調査との併用により有効であることが確認された。

以上、時代別に概述した。時代によって、遺跡の性格は大きく異なり、学術上の課題もさまざまではあるが、いずれにしても独立台地上に立地する本遺跡の大きさ・重要性が各時代ごとにも再確認されたことは間違いない。

2. 出土遺物について

今回の調査では、縄文時代前期の土器と古墳時代後期～平安時代にかけての土師器を中心として縄文時代早期～近・現代の各時代の遺物が出土している。土器については縄文時代前期の土器と79・79Bグリッド一括出土の土師器が注目される。また、石器及び剥片類が100数十点出土しているが、特に小形の剥片石器類には、一般的に縄文前期に見られる形態のものが多く、該期の遺構の濃密な分布を予想させる。以下、今回の調査で得られた中ではある程度まとまった資料である縄文時代前期の土器と79・79Bグリッド出土の土師器について概略を述べることにする。

まず縄文時代前期の土器についてであるが、前期初頭のいわゆる中越式土器をはじめとして関東地方の関山・黒浜式土器および踏磯a～c式土器に併行すると思われる土器が出土している。今回の調査では中期以降の土器は量的に少なかったが、早期末の条痕文土器がある程度出土しているなど、本遺跡においては縄文時代でもかなり長い期間にわたって人間の活動の痕跡をとどめていることが理解できる。そのなかでも土器出土量が多く、あきらかに集落跡を残していると思われる前期の遺物は上述のごとくに中越式をはじめとして櫛歯状工具を用いて施文される神ノ木式・有尾式期、阿久遺跡で大量に出土し、黒浜式(新)併行であるとされている阿久Ⅲ期のI群土器と同類と思われる土器、踏磯a～c式土器等、時間的な空白をほとんどもっていないと考え



第88图 出土器物分布图(紫土器·须臾器·土器)

られる。これまで本遺跡は、諸磯b式期を中心とする遺跡とされてきたが、より広い時期にわたる人間の活動の中心地として存在していたことが再確認された。特に前期前半については今後の検討を要する。櫛歯状工具による連続刺突文を持った、いわゆる神ノ木式的な土器および列点状刺突文を持つ土器が検出されていることは注目されてよい。また、胎土に繊維痕を有し、菱形のモチーフを爪形文で描く、黒浜式的な土器が出土しているが、やや薄手なものが含まれていることや、やはり胎土に少量の繊維痕を残し半截竹管による平行沈線を描く土器も出土していることなどと共に概期の諏訪地方における土器様相を考えるうえで興味深い。諏訪地方における同時期の遺跡としては、阿久遺跡・神ノ木遺跡・十二ノ后遺跡・千鹿頭社遺跡などが有名であるが、それらとの時間的関係・地域的な関係なども今後の検討の対象となる。本遺跡がある時期にはこの周辺地域におけるいわば拠点的な集落であることも想定されるが、出土土器などの遺物の検討により本遺跡の位置付けが進められることが望ましい。

次に79・79Bグリッド出土の土師器についてであるが、これらは坏・高坏の形態などから、およそ6世紀前葉に属するものであると考えられよう。これらの土器の特徴としては須恵器の同器形を模倣したと考えられるものが多いことがまず挙げられよう。本グリッド出土の須恵器模倣の土師器は、その形態・器種の多様性（例えば第38図12の透かし入り高坏など）から、第38図7のいわゆる須恵器模倣坏の類のように須恵器の模倣に始まりながらも独自の展開をみせていく、いわば間接的な模倣が行われる一連の土器とは異なり、ある時期の一群の須恵器を直接真似ようとしたものであることが推測される。しかしまた同時に、例えば坏蓋（坏身？）の天井部の深さ・臍の胴部の偏平性（胴部最大径の位置の低さ）などにおいて必ずしも須恵器を厳密に模倣しているとはいえない。従って、これら一連の土師器は当時における須恵器生産の技術を直接的に受け継いでいるものではないといえよう。いずれにせよこれらの土器がどういった連続性（系統）をもって制作されたものであるか、今後の検討課題であろう。また、土器配列がこの地方に類例が多い古墳などの周溝内における土器配列である可能性が高いこと、さらには少なくとも今回の試掘調査においては土器配列に伴うと思われる須恵器が検出されずに土師器だけの構成であることも注目すべきで、今後の検討課題である。

表4 グリッド別遺構一覧表

グリッド	遺構番号	遺構種類	時代・時期	主な出土遺物	本文ページ
2	No. 27	床面状?	中世(?)	土師質土器片	7
8	No. 26	溝状?	平安～中世	土師・須恵・陶器片	7
12	No. 25	竪穴状	不明	なし	7
13	No. 28	不明	中世	土師質土器片	7
18	No. 2	床面状	平安～中世	土師・須恵・灰釉片	9
21	No. 4	竪穴状	弥生～古墳	弥生土器・土師・磁器片	10
28	No. 3	床面状	平安～中世	土師・かわらけ片	11
29	No. 9	不明	平安	土師・須恵器片	12
35	No. 5	不明	弥生	弥生土器	12
37	No. 8	竪穴状?	弥生	弥生土器片・焼土	15
43	No. 24	竪穴状?	縄文・平安	縄文・土師・須恵器片	16
44	No. 17	床面状?	縄文～平安	縄文・土師・須恵器片	16
49	No. 1	竪穴状	縄文・弥生	縄文・弥生・土師器片	16
51	No. 7	床面状	縄文・平安	縄文・土師・須恵器片	18
56	No. 29	不明	縄文	凹石・磨石	20
58	No. 16	床面状	縄文～平安	縄文・土師・須恵器片	21
62	No. 20	竪穴状	縄文～平安	縄文・弥生・土師器片	22
65	No. 6	◇	縄文	縄文土器片	23
76	No. 21	◇	不明	石 鐵	24
79.79B	No. 11	土器配列	古墳	土師器多数	25
83	No. 19	竪穴状	不明	縄文・土師器片	32
85	No. 30	◇	縄文	縄文・土器片・石器類	32
87	No. 18	◇	縄文	縄文土器片	37
94	No. 15	◇	不明	縄文・土師・須恵器片	37
97	No. 22	配石	弥生?	縄文・弥生・土師器片	38
106	No. 13	床面状?	縄文	縄文土器片	39
108	No. 23	堀状?	不明	縄文・土師・灰釉片	42
112	No. 12	竪穴状	不明	縄文土器片	42

IV 結語

武居畑式土器の命名

武居畑遺跡と今日一般的に呼ばれているが、地区住民のなかには片山遺跡と呼ぶ人もいる。この遺跡の立地は神宮寺区の南西部の丘陵上にあるが、東方は西沢川によって茅野市高部区に境し、西側は女沢川によって区切られている。

すでに丘陵上の遺跡の調査によって、西から片山・武居畑・仲畑、南方山麓は保科畑、蛭子社（えびす社）と、遺跡名が小字を主にしてつけられてきた。

この遺跡が考古学会に紹介された最初は、鳥居龍藏博士編集による『諏訪史一巻』（大正十三年）である。遺物は石鏃・石匙・石錐・凹石・縄文土器・弥生土器などで、採集者は岩波純一・新村辰雄・原善次らである。この時点ですでに石匙の出土数が多いことが知られている。

昭和前期、藤森栄一、細野正夫らの踏査によると、丘陵上の北方の崖端から、崖上部にかけて、縄文前期諸磯式土器片と、鋭利な横形石匙・石鏃などが採集されている。崖面からは勾玉二個の採集もあり、注意をひいている。丘陵北方の一部は、ローム質土が表面にみられ、一部硬い部分もみられることから、表面には遺物の散布はみられない。中世あるいは近世において、表層上が削平され、崖面に寄せたか、落したとも考察されるのである。

藤森栄一は武居畑出土の縄文前期後半の土器を、武居畑土器と呼称して、縄文中期初頭土器群の前に位置づけ、編年したことがあった。

武居畑遺跡出土の縄文式土器は、前期間後半の諸磯B式土器が多く、同時に採集される横形石匙は、黒曜石製がほとんどなく、美しいチャート、サヌカイトなどの石材であり、諸磯B式土器との関係が考察されていた。

昭和31年に信濃史料刊行会刊行の『信濃史料』第一巻には、武居畑遺跡（武居平仲畑）として、藤森栄一所蔵品をとりあげている。縄文時代遺物は、南大原式・上原式・下島式・加曾利E式・堀之内式土器と、土錘・石鏃・石錐・石針・管玉。また弥生式土器・須恵器片などが記載されている。一方、武居畑地跡として、須恵甕の記載がある。

中洲村史の調査

昭和38年、神宮寺区の故細野正夫は教員退職後、中洲公民館長になった。中洲村史の編集により、区民の公民館活動のよりどころにする目的で、村史編纂をはじめられた。原始・古代の分野は当初藤森栄一に依頼したが急逝したため、筆者にまわってきた。

細野は原始・古代編の資料を求め、区民に既出資料の提出を求めた。また仲畑地籍出土の富沢

一正氏所蔵の蔵骨器出土地点の追跡発掘を実施された。また区史の資料に縄文時代の武居畑地籍の発掘を計画し、昭和52年秋に実施している。

仲畑地籍の発掘は、耕作中に発見した3つの蔵骨器の確認調査で、蔵骨器を埋置した遺構がうかがえた。また蔵骨器の復元では、3個の壺ないし甕に、上蓋をもつ形式である。

武居畑地籍の発掘調査（中洲村史参照）では、2軒の重複する住居跡があった。2号住居から南側に少しスライドする1号住居跡で、土器形式では同時期とみられる。また土坑がいくつかあって、1号土坑には完形に近い土器が横転して入っていた。

昭和52年から、筆者は市教育委員会に働きかけ、市内埋蔵文化財包蔵地分布調査を実施した。このなかで武居畑地籍で縄文前期諸磯B式土器と、石器類の発見、そして採集品所有者の確認ができた。さらに仲畑地籍で土師器高坏の確認と、直刀の出土の情報を得て、古墳の存在を予想した。また南方山腹の突出する小丘上に、直刀出土の情報を得て、ここを武居畑古墳と呼称した。

区民表採資料の調査によると、武居畑丘陵全域から表採した守屋^{つとむ}懋氏資料、150点余りを点検した。注目すべき資料は、黒曜石製でない横形石匙の多い事、石製模造品（滑石製）の剣形、鏡形が採集されていた点である。宮沢一正氏蔵品では、チャート製等の美しい横形石匙10点が注目される。五味哲男氏蔵品のかわらけの一群（11個）は、丘陵南方にある蛭子社の一段下の畑で一括出土したといわれ、古いタイプのかわらけである。これらの資料は中洲村史に採録されている。

教育委員会による調査

昭和58年に武居畑丘陵上に林道が開設される事になり、保科畑地区と蛭子社B地点が緊急発掘調査された。

保科畑は武居畑と南背後の武居城跡との間にある、やや平坦地である。山城の武居城はその山裾の、保科畑、武居畑が根小屋（居館）のあった場とみてもよい。

発掘調査は林道開設のため、小範囲であった。遺構ではガニ水道と小溝、出土品は青磁香炉破片、須恵質陶器片、中世陶器片、古銭などがある。

周辺の実測では石垣による方形区画地が階段状にみられた。発掘調査は小面積であり、周辺実測では方形区画内の発掘調査が出来なかった事、などから居館跡の確認にはいたらなかった。だが出土陶器等から、居館跡の存在が十分に想定される。

蛭子社B地点は、蛭子社前を林道が開設されるため、緊急発掘調査を行なった。遺構はガニ水道数本。巨石が1個横転しており、巨石下面にかわらけ破片の散布している層があった。

蛭子社は諏訪神社により、今日まで祭祀が続けられているが、巨石が直立していた頃、かわらけを使用しての祭祀のあったことがうかがえられるが、磯並社（茅野市高部）のように巨石崇拝があったと想定もできる。かわらけは未整理であるが、一見、蛭子社A地点出土かわらけに類似している。

蛭子社C地点は、五味哲男氏所有畑で、甕、小形九底壺、甕の出土があった。出土品からみて、フネ古墳形古墳（無石塚、周溝をもつ小墳丘）の存在が予測される。

昭和61年に、武居畑遺跡詳細分布調査が行なわれた。丘陵上に約100カ所のグリットを発掘した。結果は本報告書に詳しい。総体的にみると、丘陵上全体にわたり遺跡であることがうかがえる。遺跡の時期も、縄文前期から、中世の武居域に關係する居館跡の可能性ある地点など、長期にわたることが判明した。本調査以前の調査を合せ考えると、各時期とも遺構の濃密な包含を想定できる。

本調査で、ことにまとまった遺構、遺物を発見したものを考察してみよう。108グリットは深い黒土層であったが、石垣状の遺構の存在と深い溝からみて、濠の可能性があり、武居域、あるいは居館に關係するかも知れない。

79グリットは、丘陵頂部に近い位置であって、グリット中にはほぼ半円形に並ぶ形が高坏、甕、坑、坏、壺などの一群が発見された。これはフネ古墳形古墳の土器祭祀、あるいは同時代の何らかの祭祀場の一部であるものとみてよいだろう。

武居畑遺跡の性格

武居畑遺跡の過去、現在まで、表探、発掘調査の資料からみてみよう。今までの資料からみると、旧石器時代とすべき明確な遺物はみられない。今日まで西山地域には旧石器時代の遺物とすべき石器の発見がないのと同様である。がしかし旧石器時代遺跡がローム層ないし直上にある事から、未発見の地域の可能性もある。

縄文時代では、早期の搬入土器とみられる神ノ木式土器の発見があるが、この時期から生活の場として利用されていた。縄文前期後半になると、諸磯B式期の集落が、南向きの日当りよい武居畑地籍に出来た。

古墳時代に入ると、上社のある西山地域に、フネ古墳形の古墳が築造される。上社西方丘陵上に、フネ古墳、片山古墳、本城古墳（真志野）東方に狐塚古墳（茅野市高部）がある。上社東方に隣接する、武居畑地籍の丘陵上も出土土器から、5・6世紀の古墳の存在が予想されていたが、明確な発見はなかった。本調査においてグリット79の例、蛭子社C地点例などは、古墳の所在を十分に予想させるものであり、そのほか直刀出土地も可能性が高い。

仲畑地籍には、11世紀とみられる須恵器系陶器を用いた、蔵骨器が発見されている。これは火葬骨用のもので、被葬者は位置からみて、上社關係の地位ある人の墓とみられる。

蛭子社の周囲では、13世紀頃から、祭祀にかかわりけを使用するようになり、上社本宮、前宮、あるいは磯並社と同様の祭祀をしたことがうかがえる。

中世末、武居域が築かれたものとみられるが、記録には不明である。本郷は標高942メートルで、城の峯といい急な山城である。武居域に關係する居館の存在が予想されるのは、武居平といわれる武居畑の丘陵上と、保科畑地籍である。

中洲村史記載の「諏訪古事記」によると、「武居平は諸士の居館とし、すべて片山の端より平の内へ外曲輪……」とみえる。また「神長満実書留」文明16年5月に、大祝繼満は高遠繼宗と小笠

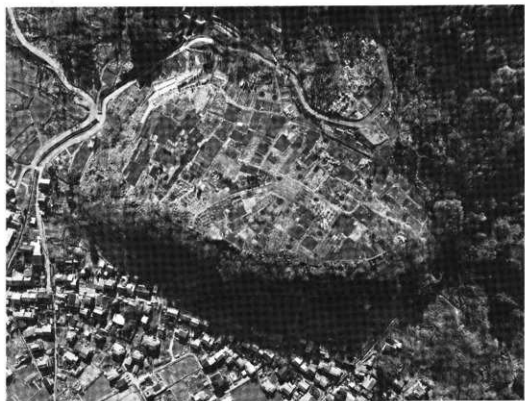
原政貞の助勢を得て、高遠から逆襲し、片山古城を取立て、諏訪勢は干沢城（茅野市小町屋）に拠って対抗したとある。片山古城とは武居城のことであるとみられる。したがって古戦場であった可能性もみられる。

武居畑遺跡は以上のように、諏訪の歴史上、重要な役割を果たした土地として、各時代の遺跡が埋蔵されているのである。今回の分布調査により、今後の土地利用について、1つの指針を与えたものとみてよいであろう。

—引用・参考文献—

- 1 鳥居龍藏 1924 『諏訪史第一巻』
- 2 藤森栄一 1930 「注意すべき祝部土器二(数行録)」(『信濃考古学会誌』2-1)
- 3 藤森栄一 1930 「注意すべき祝部土器三(数行録)」(『信濃考古学会誌』2-2)
- 4 中村竜雄 1969 「諏訪市神宮寺仲畑の蔵骨器群」(『長野県考古学会誌』7)
- 5 宮坂光昭 1973 「文化財めぐり—神宮寺片山遺跡」(『諏訪市報』48-12)
- 6 日本道路公団名古屋建設局 1975 『長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書
長野県教育委員会 諏訪市・その3』
- 7 日本道路公団名古屋建設局 1976 『長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書
長野県教育委員会 諏訪市・その4』
- 8 宮坂光昭 1978 「武居畑遺跡」(『日本考古学年報』30)
- 9 戸田哲也・大矢昌彦 1979 「神之木式・有尾式土器の研究(前)」(『長野県考古学会誌』34)
- 10 今村啓爾 1982 「諸磯式土器」(『縄文文化の研究』3)
- 11 日本道路公団名古屋建設局 1982 『長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書
長野県教育委員会 原村・その5』
- 12 細野正夫・今井広亀・宮坂光昭 1985 『中洲村史』(中洲公民館)
- 13 三県シンポジウム 1987 『縄文前期の諸問題 講演・発表要旨』

写真図版



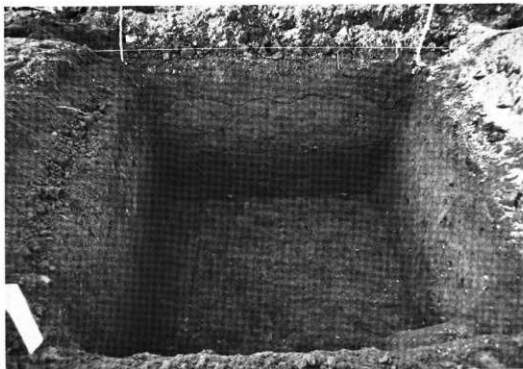
1 遺跡全景（航空写真）



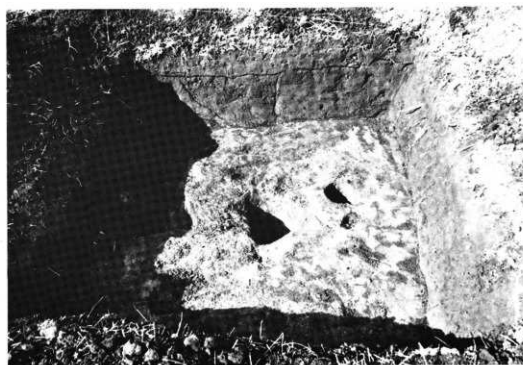
2 遺跡近景 (中央より東方、八ヶ岳を望む)



3 8グリッド (遺構 No.26)



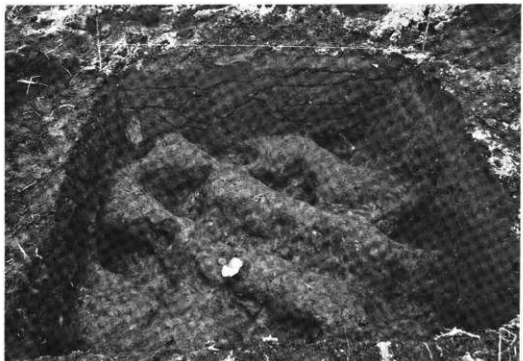
4 43グリッド (遺構 No.24)



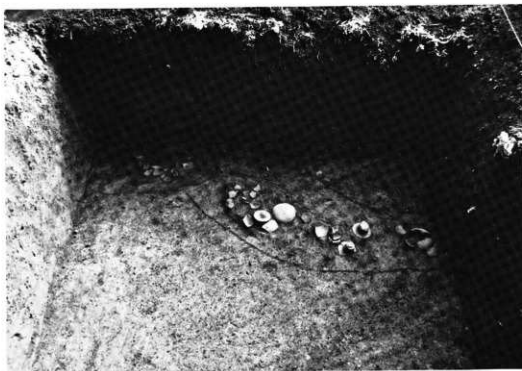
5 58グリッド (遺構 No.16)



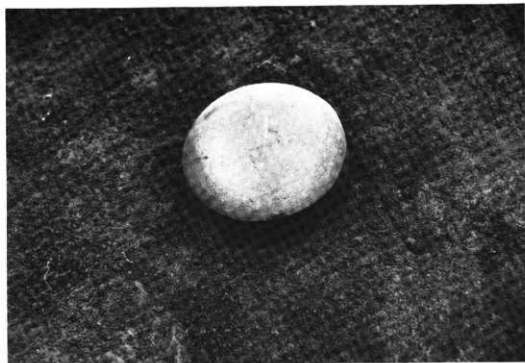
6 85グリッド (遺構 No.30)



7 106グリッド (遺構 No.13)



8 79グリッド（遺構 No.11）の土師器配列



9 79グリッド（遺構 No.11）の土師器配列



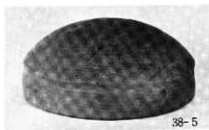
10 18・28グリッド出土土器



11 35グリッド出土土器



12 79・79Bグリッド出土土師器各種





39-14



39-15



39-16

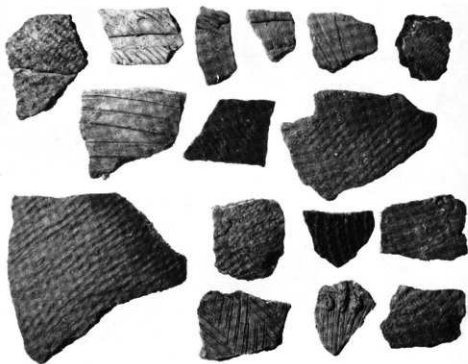


39-17

14 79・79B グリッド出土土器(2)



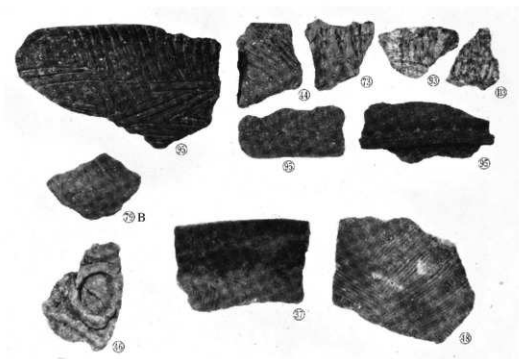
15 85グリッド出土土器



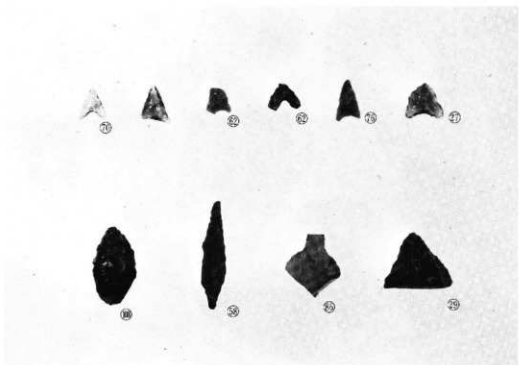
16 106グリッド出土土器



17 各グリッド出土土器(1)



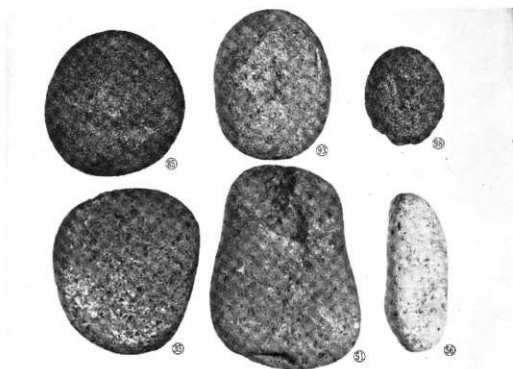
18 各グリッド出土土器(2)



19 各グリッド出土石器(1)

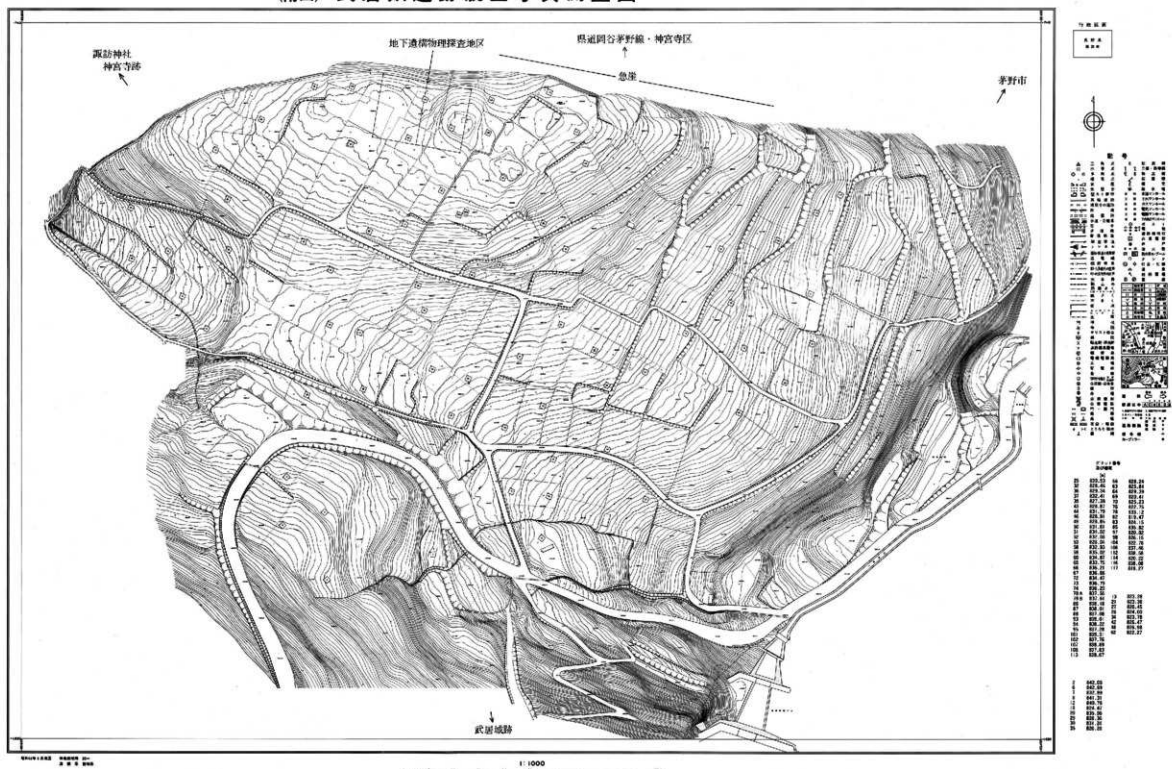


20 各グリッド出土石器(2)



21 各グリッド出土石器(3)

(附图) 武居畑遺跡航空写真測量図



武居畑Ⅱ

—長野県諏訪市武居畑遺跡第4次発掘調査報告書—

1988年3月20日

編集 武居畑遺跡調査団
発行 諏訪市教育委員会
印刷 ㈱マルジョー上田印刷
